

# 「文検国語科」の研究（２）

## ——筆記試験の構成と全体像——

小笠原 拓\*

### A Study of the Certificate Examination for Secondary School Teachers of “Japanese” in Pre-War Japan (2)

OGASAWARA Taku\*

キーワード：教員検定試験制度 「国語科」 試験問題 教員の学び

Key Words: Certificate examination for Secondary School Teachers, “Japanese”, Test, Learning of teachers

#### I. はじめに一問題の所在一

本研究は、戦前期に実施された「文部省師範学校中学校高等女学校教員検定試験」のうち、「国語科」の教員検定試験制度（以下「文検国語科」と略記）に着目し、その実態の解明を目的とするものである。戦前期において、多くの中等学校における「国語科」教員を輩出した制度の実態を明らかにする作業を通じて、当時の「国語科」教員に求められた学びと教養について論じる手がかりを提示したいと考えている。「文検国語科」の実態を明らかにする上では、具体的に様々な作業が必要となるが、本論文では、特に検定試験の際に実施された試験問題に着目し、その水準や問題の範囲などをみていくことにしたい。

「文検国語科」に関する研究の進展については、既に指摘している<sup>1)</sup>ので、ここでは繰り返さないが、現在のところまだ事実の解明が十分に行われたとは言い難い。「国語科」以外の教科において研究が進んできているものの、「国語科」については、筆者も含め研究は停滞しているといっても過言ではない。特に試験問題についての分析は、かつて筆者が論じた<sup>2)</sup>以外には管見の限り見ることができない。これは、実施期間が長く調査そのものに時間がかかること、試験範囲が多岐に渡るため内容や難易度についての分析が難しいことなど様々な原因が考えられる。研究が進んでいる「地理科」「修身科」「家事科」といった学科目と比較して、試験内容が、教育史的な関心呼びにくい（例えば「修身科」は戦前における道德観の問題と絡めて論じることが可能であるし、「家事科」については同様に女性観との関連を探らずにはおれないであろう）といったことも、一因になっているのかもしれない<sup>3)</sup>。筆者自身、これまで問題の収集についてはかなりの成果をあげることができたが、内容の分析については切り口を含め未だ模索の段階にあると言わねばならない。

そこで本論文では、まずこれまでに収集した問題について、収集のプロセスを明らかにするとともに、（不十分ではあるが）これまでに集めた問題を資料として提示することを第一の目的とした

---

\*鳥取大学地域学部地域教育学科

い。十分な分析が行えていないことは承知の上ではあるが、整理された形で問題を公開することによって、多方面からの研究を促すことが可能になるかもしれない。データの誤りなどについても多方面からの指摘があることをむしろ期待している。いずれにせよ、やや不完全な形でデータ開示に踏み切ったのは、そもそもこれらの試験問題の全体を見渡せるような整理が現時点でなされていなかったからである。試験問題の全体像に関する情報を共有することにより、今後の研究の深まりに繋がるのではないかと考えている。

## II. 試験問題の収集と整理

先にも少し触れたが、「文検」の試験問題に関する研究の難しさの一因として、その内容に関する公的な発表がほとんど行われていなかったことが挙げられる。ごく稀に、文部省年報などで発表されていたこともあったが、ほとんどの場合、公的な機関による発表はなく、問題は非公開であった。そのため試験問題については、当時出版された試験問題集や受験手引書、さらには受験雑誌に掲載された記事などが専ら手がかりとなる。無論、これらの資料に掲載されているのは、それぞれ出版された時期を起点とする限られた期間の問題のみであり、一つの資料がすべての年代の試験を網羅しているということはない。従って、いくつかの書物の情報を重ね合わせながら、試験が行われた期間全体の試験問題を収集していく必要がある。これまでの調査で利用した受験手引書や問題集のうち、代表的なものは以下の通りである（カッコ内は掲載されている問題の年度）。

- ・国文学雑誌社編『国語漢文科 中等教員志望者必携』明治書院, 1903年。(1885年～1902年)
- ・三幣嶺南編『国語漢文検定試験答案』大学館, 1910年。(1900年～1909年)
- ・北川三友・若山操編『中学校師範学校高等女学校 教員受験撮要』修学堂, 1912年。(1885年～1910年)
- ・瀧澤良芳『文検受験用 国語漢文科問題詳解』大同館書店, 1915年。(1915年～1924年)
- ・西川良一『文検国語科の新研究』文泉堂, 1935年。(1921年～1934年)
- ・山下賤夫『文検指定国語科必読書の研究』大蔵広文堂, 1935年。(1912年～1934年)

先に断っておかなければならないが、残念ながら現時点において、1935（昭和10）年以降の問題を見つけることが出来ていない。これはあくまで筆者の時間的な制約によるものであり、時代的には新しいものであるため、搜索そのものは可能であると考えている。但し時代状況を考えた場合、まとまった形で掲載されている資料を見つけるのは困難かもしれない。今後、受験雑誌等を丹念に当たっていくこととしたい。

いずれにせよ、これらの資料によって、第1回から第61回までのうち、「国語科」の試験が実施された際の試験問題を収集することができた。本論文では、次節において詳述する試験問題の構成に則って「解釈」の部、「設問」の部、「作文」の部に分け、その全てを論文の末尾に資料として添付する（但し、「解釈」の部については、紙幅の関係から、出典のみをまとめた）。様々な制約のなかで整理したものであるとともに、問題収集の過程で誤植などが起こりやすい（筆者自身のミスはもとより、もともとの資料の中に誤植がある可能性も否定できず、かつ確認も難しい）ため、データとして不完全であるという批判は免れないが、試験内容の変遷など全体像を俯瞰するための資料が是非とも必要であるとの認識から公開することを優先した。あくまで暫定的な資料としての性格を

有していることを重ねて指摘しておきたい。以下では、この添付資料に基づいて、試験問題の特徴や難易度、時代ごとの変遷等についてみていくこととする。

### Ⅲ. 試験問題の構成とその変遷

文検は、1884（明治17）年8月13日に制定された「中学校師範学校教員免許規程」（文部省達第8号）に基づき、翌1885（明治18）年から開始されている。先にも少し述べた通り、基本的に試験問題は、三つの部分で構成されていた。具体的には、第1に、ある一定の長さの古文や現代文（これについては後に詳述）を読み、その意味内容を問う「解釈」の部、第2に、古典文法や有職故実など古典を理解する上で必要な国語的な素養、さらには文学史的知識や国語教育上の問題などを問う「設問」の部、第3に、特定のテーマに関する一定量の文章を記述することを求める「作文」の部の3つである。

但し問題形式を見る限り、初期はかなり流動的で、不安定なものであった。例えば、第1回目の「解釈」の部では、かなりの長文（400字～1400字）の問題が9問も並び、さらに数種の和歌や長歌の解釈まで課されていた。これは、例えば問題が安定してきた明治末から大正期の問題が、2問程度（しかも多くの場合、1問は和歌の解釈）であったことと比較すると、かなりの難問が課されていたことになる。試験形式についても、不安定さを見ることができる。所謂「予備試験」と「本試験」の二段階選抜になったのは、1897（明治30）年の第10回からであったが、その本試験についても、第10回は4つの「設問」のみが課され、次の第11回では、本試験における筆記試験そのものが行われなかった。本試験の「設問」についても、1902（明治35）年の第15回頃までは、問題数にばらつきがあるなど、かなり流動的なものであった。

問題の形式や出題内容がある程度安定してくるのは、予備試験・本試験方式が確立し、さらに試験範囲の目安となる指定書の設定がなされた第21回（1907<明治40>年）以降ではないかと思われる。たとえば第21回（明治40年）の場合、「解釈」の部では、予備試験が「大鏡」1問と「古今和歌集」から3首、本試験が「万葉集（額田王作の長歌）」、「古今和歌集仮名序」、「平家物語」の3問の出題となっている。ここに「設問」の部として、予備試験で6問、本試験で8問（但し「漢文」の問題を含む）が出題され、「作文」の部でも予備試験・本試験ともに各1問ずつが課されていた。

指定書については、1907（明治40）年3月29日の『官報』において提示された。具体的には、『古事記』・『万葉集』・『源氏物語』・『枕草子』・『古今和歌集』・『新古今和歌集』・『大鏡』・『増鏡』・『平家物語』・『太平記』・『徒然草』の11作品である（漢文の指定書は除く）。指定書はあくまで目安であり、指定書以外の問題が出せないという訳ではなかったが、「解釈」の部の出題傾向を見る限り、特に出題形式が安定してからは、指定書が出題の中心となっていた。

例外は、大正期に入って、「解釈」問題のなかに古文以外の出題がみられるようになったことである。第34回（1920<大正9>年）から予備試験において、「要旨を説明せよ」といったかたちで、同時代に書かれた長文が1問ずつ出題されるようになった。例えば1920（大正9）年の第34回では、夏目漱石の『虞美人草』の一節が出題され、その要旨説明が「解釈」問題の1つとして扱われていた。毎年とは言い難いものの、同様の出題は、これ以降、大正から昭和初期にかけて主に予備試験の中で見ることができる（年によっては、「設問」の部の中に、同様の問題を設定している場合もあった）。

また今回の資料では省略しているが、実際には「国語漢文科」という枠組みで実施されていた1921

(大正10)年までは勿論のこと、それ以降も予備試験においては漢文の内容が課されていた。予備試験の漢文では、一般的に「漢文解釈」(句点・返り点・送り仮名を付し、意味を解釈する)・「設問」(中国文学等に関する知識を問う)・「復文」(読み下し文として書かれた漢文を、元の白文の形に戻す)の3種類の問題が古典分野と同様に出题されていた。

従って試験時間も、それに応じてかなりの長時間に渡ることとなった。例えば1930(昭和5)年の第53回の試験を例にとると、予備試験は2日に分けて実施され、1日目が「設問」4問(古文および漢文)・「作文」1問・「復文」1問で4時間30分。2日目が、「解釈」6問(古典2問、漢文4問)で4時間30分の計9時間となっていた。この予備試験合格者が受験できる本試験では、国語分野のみが出题され、「解釈」2問、「設問」3問、「作文」1問を4時間30分で回答することが求められていた<sup>4)</sup>。

これらのことを踏まえて、次項では、「解釈」「設問」「作文」それぞれの出题傾向や難易度などについて、具体的に問題に当たりながら、その特徴を見ていくことにする。

## IV. 試験の実際

### 1. 「解釈」の部

先にも触れたように「解釈」の部とは、文字通りある一定の長さの古文を読み、その意味内容(口語訳)を問う問題である。現在の大学受験等の場合、こういった問題は大抵が本文中の一部(1~2行程度)を訳すのが一般的であるが、文検国語科では、出题された本文全体の解釈を求められるのが一般的であった。分量や難易度を把握するための参考として、1921(大正10)年に実施された第35回本試験の問題のうち、「解釈」の部分を示すこととする。

#### 解釈

一、渚による浪のかつかへるを見たまひてうらやましくもうち誦じたまへるさる世のふる事なれども珍らしく聞きなされ悲しとのみ御供の人々思へりうち顧みたまへるに來し方の山は霞はるかにてまことに三千里の外のここちするに權の雫もたへがたし

ふるさとを峯のかすみはへだつれどながむる空は同じくもみか

つらからぬものなくなむおはすべきところは行平の中納言の藻鹽たれつつわびける家居近きわたりなりけり海面はやや入りて哀に心すごげなる山中なり垣のさまより初めて珍らかに見たまふ茅屋ども葦ふける廓めく屋などをかしょうしつらひなしたる所につけたる御住居様変りてかかる折ならずばをかしょうもありなましと昔の御心のすさびおほし出づ(源氏物語)

二、梓弓手にとりもちてますらをのさつ矢たばさみ立ちむかふ高圓山の春野焼く野火とみるまで燃ゆる火をいかにと問へばたほこの道くる人のなく涙ひさめに降ればしろたへの衣ひづちて立ちとまりわれに語らくなにししかもとないへる聞けばねのみしなかゆ語れば心ぞいたきすめるぎのかみのみこのいでましの手火の光ぞここだ照りたる(萬葉集志貴親王薨時作歌)

(出典) 西川良一『文検国語科の新研究』(文泉堂書房、1935年、379-380頁)

初期の明治10年代~20年代にかけては、こういった問題が7~10問程度(第1回は15問)出题されることもあったが、問題の形式が安定してからは、2~3問が一般的であった。またこの年は万葉

集の長歌が出題されているが、この部分が数首の和歌等にも変わることもあった（無論、韻文がなく全ての散文の解釈の年もある）。この程度の長さの文について、文法的な事柄にも配慮しながら正確な口語訳を書くことが受験生には求められた。受験参考書は、「解釈」の解答の仕方について、試験委員である保科孝一の言葉を借りながら次のように説明している<sup>5)</sup>。

散文の方の解釈は通釈を本位とすべきで、語釈、口訳、大意、批評など、細目にわけてわづらはしく書くのは試験答案としては却つてよくない。「古文の解釈についてもつともふかく注意すべきことは、語句や文章の意味を簡明に適確に現代語に訳すると云うことであります。」と保科委員が受験者に告げて居られる。（文検受験生昭和九年十月号）簡明的確な現代語訳といふのは、古文を逐語的に口訳して、しかも出来上がった文がすらすらとした意味のよく通る現代文であるといふ事である。逐語的な解釈であつても、明治初期の外国文学の翻訳文に似通ふやうなごつごつ（原文は二文字の繰り返し記号——引用者注）たものでは駄目である。

おおよその意味を示したり、自らの解釈を加えたりするのではなく、あくまで逐語的な口語訳でかつ分かりやすい日本語となるような解答が求められていたことが分かる。出題状況を見ても分かるように、指定書からの出題がなされる確率は高かったため、受験生にとっては指定書を全て読むべきかそれとも重要な部分に絞るべきかが、独学を行う上でしばしば懸案となったようである。しかしいずれにせよ、全ての作品の口語訳を丸暗記する訳にはいかない（しかもそれ以外からも出題される可能性は否定できない）ので、当然、どのような文章が出題されても適切な口語訳を書く事が出来るような古語や文法に関するしっかりとした知識を身につけている事が、合格のためには必要であった。

## 2. 「設問」の部

「設問」の部では、古典作品に関連する事項を中心に、文法や文学史など国語に関する様々な知識が問われた。しかし、一口に「設問」といっても、問われる内容は時代によってかなり変遷があったようである。末尾に掲げる資料と重複する事になるが、出題傾向および形式の変遷を具体的に見ていくために、以下に明治・大正・昭和よりそれぞれ1年分の問題を掲げることとする。

### 【第3回（明治20年）】

- 1 短, 虹, 梶, 躑躅, 蚯蚓, 法師, 格子  
右, 訓の仮名をつくべし
- 2 小路は古来こうちと書き日向は古来ひうがと書く  
右, 何故にうと書いてふとは書かぬか其説明をすべし
- 3 思ふ事千枝にや繁し呼子鳥そのだの森の方に鳴くなる
- 4 出づるとも入るともなく足引の山の尾上にすめる月かな  
右, 二首の歌のあやまりを直すべし指点して其正誤をつく(る?)べし
- 5 はたらかす, 生く  
右, 二語何段の活用といふ事を説明すべし

### 【第33回（大正8年）予備試験】

- 1 左の文を品詞上より解剖せよ（用言には活用及法（形段）をも記せ）。  
かくあやなき業の出で来ぬるはこの世一つの事にもあらざらめども迷のおろかなる前にはなほいとあやしかし

<p>2 口語の主格助詞がのの別及動詞あるをるの別を例を挙げて説明せよ。</p> <p>3 左の修辞学上の名称を例を挙げて説明せよ。          隠喩 調和 擬人 漸層</p>
<p>【第33回（大正8年）本試験】</p> <p>1 源氏物語と枕草子に就きて比較論評せよ。</p> <p>2 京伝と馬琴に就きて記せ。</p> <p>3 左の文を文章法上より解剖せよ。          なき跡まで人の胸あくまじかりける人の御おほえかなとぞ弘徽殿などには猶ゆるしなうのたまひける。(源氏物語)</p>
<p>【第53回（昭和5年）予備試験】</p> <p>1 浦島伝説羽衣伝説義経伝説を取扱ひたる文学的作品を挙げその作者並に成立時代に就いて知れる限りを記せ。</p> <p>2 左の文中より主語を摘出してその性質を説明し又助詞形容詞及助動詞の活用表を作れ。          萬のことは月見るにこそ慰むものなれ或人の月ばかり面白きものはあらじと言ひしに又一人露こそ哀れなれと争ひしこそをかしけれ</p> <p>3 左の詩を評論せよ。          この泉を汲まうとするな          闇の中で吃るやうな声をして涌いて          あらゆる日の光あらゆる歓楽を黙って中に蔵してある泉だ          この泉の黄金なす水を          汲むことの出来る人は一人も無い          只自分を犠にして持つて往く人があつたら          この水はそれを迎へて高く迸り出るだらう</p>
<p>【第53回（昭和5年）本試験】</p> <p>1 発音的仮名遣と歴史的仮名遣とによりて口語の動詞の活用に及ぼす異同について説明せよ。</p> <p>2 浮世草子・読本・合巻・滑稽本の性質を簡単に説明せよ。</p> <p>3 左の人々の重なる著書の名を挙げよ。          契沖 谷川士清 伊勢貞丈 平田篤胤 橘守部</p>

## [備考]

※ 国文学雑誌社編『国語漢文科 中等教員志望者必携』（明治書院，1903年），山下賤夫『文検指定国語科必読書の研究』（大蔵広文堂，1935年）等を参照して作成。

※ 漢文関連の問題は省略している。

1887（明治20）年に行われた第3回の試験を見ると，漢字や仮名遣いを問う問題（1，2），語法上の誤りを問う問題（3，4），動詞の活用の仕方を問う問題（5）となっており，文法や文字表記に関してかなり細かい知識を扱っていることがわかる。一方，文学史の問題は，まだ取り上げられていない。このような傾向は，1894（明治27）年の第7回頃まで続くが，明治30年代に入ると，文学史の問題が一般的に取り上げられるようになる。第12回（1899〈明治32〉年）と第13回（1900〈明治33〉年）には，問題中で（文学史）と（文法）という区分けが行われ，それぞれ5問ずつの問題が課されている。以後の試験では，このような明確な区分けはなされておらず問題数も減少していくものの，文法と文学史が主に出題されていた（但し，1895（明治28）年に行われた第8回の試験では，（国語教授法問題）とという区分けが例外的になされている）。1919（大正8）年に行われた第33回の試験に課された文法問題（予備試験の1，本試験の3）は，かなり長文ではあるものの現在の大学受験などでもみかけるような「品詞分解」を問うものである。また文学史については，こ

こに挙げてはいないものの、1923（大正12）年に行われた第38回の試験において、「高山樗牛 徳富蘇峰 有島武郎 芥川龍之介」の「著作について所見を記せ」といった問題（予備試験の1）や、「小説神髓 浮雲」について「知れる所を記せ」といった問題（本試験の2）のような、近代以降の作品が登場していた。一方で、第38回試験における「源氏物語と枕草子に就きて比較論評せよ」という問題（本試験の1）や、1930（昭和5）年に行われた第53回の試験における「詩を評論せよ」（予備試験の3）や「浦島伝説羽衣伝説義経伝説を取扱ひたる文学的作品を挙げその作者並に成立時代に就いて知れる限りを記せ」（本試験の1）といった問題のように、単純な知識だけでは解けないような問題も出題されるようになっていった。

現時点で、これらの問題の難易度を印象のみで語ることは控えたいが、受験生にとってもどちらかといえば、「解釈」の方に学習の重心が置かれることが多く、「設問」（および「作文」）はやや軽視される傾向があったようである。しかしそれは、「設問」が易しいからというよりも、「解釈」等の学習を通じて「常識」として身につけておかなければならないような内容が出題されていると考えられていたからである。例えばある受験参考書では、「設問」の難易度や取り組み方について、次のように述べられていた<sup>6)</sup>。

我々が設問の既出問題を通観して思ふことは、それらが総て国語乃至国文学の基礎的知識に関するものであり、何れも高等常識の程度を出ていないものであるといふことである。これは規程九條の銘文によつて当然のことではあるが、——またそれだからこそ、これは我々の常識の「レヴェル」を示すものと見ることが出来るのだと思ふ。即ち此の設問程度の常識は、我々にとつて絶対的に必要なものであつて、此の水準に達しない者は、国語教育者として「コンマ」以下と見られても仕方があるまい、と思ふ。受験的な諳記学問でなくて、身についた実力として此の程度の学力は蓄へて居なければならぬと思ふ。

これに続けて、この受験参考書では、「文検程度では、あまり詳しいことを多く知つて居るよりも、基礎的な根本的な事項をよく理解し、性格に記憶して居て、それらが必要に応じて自由に運用出来るといふやうになつて居なければならぬ。」<sup>7)</sup>とも述べられている。ちなみに、上記の引用文における「規程九條の銘文」とは、「師範学校中学校高校等女学校教員検定規程」のうち、第9条における、「試験ハ受験者出願ノ学科目に就キ其ノ教員タラムトスル学校ノ学科目ヲ教授スルニ足ルヘキ程度ヲ標準トシテ之ヲ行ヒ」という部分を指している。受験生にとって、「設問」で問われているような問題は、中等校の国語科教員として教壇に臨む上で、「常識」として自在に扱えるようなものとして身につけられていなければならぬと捉えられていたことが窺われる。

### 3. 「作文」の部

最後に、「作文」について見ていくことにする。作文については、ほとんどの試験で課されていることが確認できるものの、問題は作文の題と文体（普通文、口語文、文語体など）が示されるだけの簡素なもので、どのぐらいの内容や長さが求められたのか、問題から判断することは難しい。第10回（1897〈明治30〉年）頃までは、1回の試験で複数の問題が出題されたこともあったが、それ以降は、ほとんどの場合、予備試験および本試験で各1問ずつが出題されたようである（但し、一部未確認の年あり）。

時代を追って順に見ていくと、初期の「作文」試験には、学校に関わる事柄をテーマにした題が

多い。例えば「某学校の記」(第2回)、「女学校創立の記」(第3回)、「師範学校卒業生に告ぐ」(第7回)、「修学旅行の記」(第10回予備試験)、「高等女学校開校の祝辞」(第20回本試験)といった題がそれにあたる。しかしそれ以上に、国語教育に関する問題が出題されていたことに注目しておく必要があるかもしれない。例としては、「和文を教ふる順序を論ず」(第2回)、「国語教育の要旨」(第9回)、「作文添削の標準を論ず」(第13回本試験)、「中等教育に於ける国語漢文の関係を論ず」(第14回予備試験)等が挙げられる。また「作文」ではなく「設問」の領域ではあるが、「読書科教授をして最も興味あらしむる方案如何」(第10回本試験)、「師範学校中学校高等女学校国語科用読本には差異を立つる必要ありや」(第12回本試験)、「小学校に於ける文法の教授案を示せ」(第20回本試験)といった出題も明治期にはなされていた。同様の出題は、大正期以降には見られない。これは、「教育ノ大意」を受験することが義務づけられたことにより、教育に関する資質や知識の有無は、「国語科」の試験において行う必要がないと考えられたからかもしれない<sup>8)</sup>。

一方、大正期に入ると、「我が郷里」(第27回予備試験)、「秋」(第29回本試験)、「秋の田舎」(第30回本試験)、「我が家」(第32回本試験)、「我が郷の秋」(第33回予備試験)、「夏の夕」(第34回予備試験)、「月夜」(第36回本試験)、「初夏の田園」(第38回予備試験)、「五月初の感想」(第40回予備試験)、「新緑」(第42回予備試験)、「晩秋」(第43回予備試験)、「旅に出て」(第44回予備試験)といった、やや当たり障りのない、随想的な文章を想起させるような題が多く出題されている。書かれた内容以上に、文章力や対象に対する視点の取り方といったものが評価の対象になっていたと考えることもできる。

但し同時期には、「わが愛読の書」(第35回予備試験)、「万葉集を読みて」(第37回本試験)、「わが国文研究の態度」(第42回本試験)、「方丈記を読む」(第44回本試験)など、受験者の学習への姿勢や方法論などが問われている問題が多く出題されていた。この日まで受験勉強を続けてきた受験生にとって、身近で書きやすい題材が選ばれているとも考えられるが、受験勉強が試験のためのそれに終わることなく、基礎的な素養にまで昇華されているかどうかを確かめようとする意図があったのかもしれない。

また大正期には、徐々にではあるが、社会情勢に関する話題も出題されるようになっていく。「欧州戦乱に就きて」(第28回本試験)、「講和大使を迎ふ」(第33回本試験)、「現代の時勢に鑑みて青年に論ず」(第34回本試験)、「震災の感想」(第39回予備試験)、「我が時勢観」(第41回予備試験)、「現今の世相に対する教育者の態度」(第45回本試験)などがそれにあたる。この傾向は、昭和期入ってなお強くなり、「昭和の御代と国民の覚悟」(第47回本試験)、「思想善導に関する意見」(第49回予備試験)、「御大礼に際して国民の覚悟を述ぶ」(第49回本試験)、「時勢に鑑みて節約を人に勧む」(第51回予備試験)、「我が国体」(第53回本試験)、「正義の勝利」(第55回本試験)、「日本精神」(第59回本試験)といった、より政治的色彩の色濃い出題が行われていた。

受験参考書などを見ると、「作文」はあまり受験生には重視されなかったようであり、参考書の中には、「作文」についての記述がほとんどないものも見受けられる。ある受験参考書の著者は、試験まで「作文を受験的に書くといふことを殆ど考へて居なかつた」ため、「試験場では、与へられた短い時間に、与へられた文題に就いて、しかも適当な長さに纏めるといふことは、甚だ難事——否、殆んど出来ない相談であつた」と告白している<sup>8)</sup>。無論そのことの問題を指摘する参考書も中には存在しており、その一つでは、「作文」の準備の重要性が次のように述べられている<sup>9)</sup>。

受験の志望を懐くものが平素作文を軽んじて練習を積まざるのは決して策の得たるものとは言

へないのである。予備試験にも本試験にも即席課題があるから、咄嗟の間に多少の趣向が浮かび筆の廻るやうにして置かねばならぬ。本来作文は単に参考書の勉強や記憶だけで成功するものではなくて必ず自ら作つて見て練習せねばならぬ。而もそれが一念や半年の短日月では急速に上達できるものでないから、予め其の稽古を積んで正確流暢に書けるやうにしておくのが肝要である。それが単に作文試験の為ばかりでなく、凡ての答案を迅速明瞭に書きあらはす方便としても粗略には出来ない訳である。

残念ながら、実際の作文がどのように評価され得点に反映したのか、更に合否にはどの程度影響したのかといったことは、出題された内容だけを見てもよく分からないのが実情である。試験を作成した試験委員のコメント等について調査・分析を進める必要があるだろう。今後の課題としたい。

## V. おわりに一見えてきたことと今後の課題一

冒頭に繰り返し述べたように、あくまで暫定的な調査結果であり、内容についての分析はさらに詳細に進めていく必要がある。とはいえ全体像を見渡すことにより、「文検国語科」において求められた能力の一端は見えてきたのではないかと考えている。

まず（漢文を別にすれば）受験生の最大の課題は「解釈」問題にあり、特に指定書とされた11の書物をしっかりと読みこなすだけの能力が求められていたことがわかる。これは中等教育だけを受けた者（例えば師範学校卒業者など）にとっては、やはりかなり高いハードルであり、しっかりと「独学」が不可欠であったと推測される。とはいえ、指定書を読破するのはやはり困難な課題であり、正面から「研究的に」取り組んだかどうか問われていた。

次に「設問」であるが、一般的には「予備試験は常識的、本試験は論述的（専門的）」というふうに分けられていたようである。問題を見る限り、必ずしも「常識」というには難し過ぎるのではないかという印象を与えるものも少なくないが、即断は慎みたい。但し受験生においては、むしろこれらの問題を「常識」と見なせる程度の素養を、「解釈」問題を中心とした学習によって身に付けておかなければならないと考えられていたようである。

「作文」については、出題内容は時代によって大きく変化をしていった様子が明らかとなった。即ち明治期には学校をテーマとした題が多く出題され、国語教育的な出題も見られたが、大正期に入ると随想的な文章を書かせるような題が中心となり、時事的な内容も出題されるようになった。時事的な出題は、昭和期になるとさらに頻度を増し、内容もより政治的なものとなっていったことを確認することが出来た。

難易度や出題の意図などについては、今後、試験委員の研究や受験体験記などの分析を進めることで、より明らかになってくるはずである。また出題傾向の変容についても、当時の中等学校をはじめとする「国語科」の教育内容の変遷と照らし合わせながら、考察を深めていく必要があると考えている。

最後に一つ、より発展的な課題について言及しておきたい。それは、「文検」の試験問題が有する「権威化」の機能についてである。現代とは異なり、例えば明治期などは学問の体系そのものがまだ脆弱かつ不安定であった。それ故、いわば試験問題の出題＝解答というプロセスが学問内容全体とは言わないまでも、学問の基礎を研究者と研究を志す人々が共有する場として機能していたことが考えられる。言い換えれば、事前に必要な素養が定められているというよりも、出題＝解答の過程

において「国語的素養とは何か」が定められていった可能性があるということである。教科書の研究等でも同様のことが言えるが、「文検」の場合、合格者が教師として教壇に立っていたことを考えると、その結果はより「権威的」に働いた可能性が高い。「国語的教養」の「権威化」がどのように行われていったかという観点で、試験問題全体の変遷をみていく必要がある。例えば、1920（大正9）年の予備試験「解釈」の部では、夏目漱石の「虞美人草」が出題されていたことは既に述べた。さらに1922（大正11）年の予備試験「解釈」の部でも、有島武郎の「惜しみなく愛は奪ふ」が出題されている。現代からみれば、いずれも近代文学の「古典」であるが、「虞美人草」の初出は1907（明治40）年で出題の13年前、「惜しみなく愛は奪ふ」に至っては初出が1917（大正6）年で出題のわずか5年前である。つまりこれらの作品は、同時代的な評価は当然あったにせよ、「古典」とみなされていたから出題されたというよりも、むしろ出題されたこと自体が「古典」としての「権威化」に作用している可能性が高いとみなしなければならない。このことは近代文学だけに限られることなく、古典文学についても同様の事を考える必要があろう。指定書の11作品がどのように制定されたのか等も含め、私たちが「古典」と考えるものがいかにして形成されたのかという観点からも、分析・検討を進めていきたい。（了）

#### （注）

- 1) 「文検」および「文検国語科」に関する先行研究については、拙稿「『文検国語科』の研究（1）—その制度と機能について—」（鳥取大学地域学部編『地域学論集』第4巻第1号、2007年5月）等を参照。
- 2) 拙稿「『文検国語科』の研究—試験問題の分析を中心に—」（全国大学国語教育学会岐阜大会実行委員会編『国語科教育研究—第109回大会研究発表要旨集—』2005年10月、94-97頁）、および拙稿「『文検国語科』試験問題にみる戦前の中等学校国語科教員」、日本国語教育学会編『月刊国語教育』（第411号、2006年7月、46-51頁）等を参照。
- 3) 注1）執筆以降に発表された「文検」に関する研究の代表的な著作としては、井上えり子『「文検家事科」の研究—文部省教員検定試験家事科合格者のライフヒストリー—』（学文社、2009年）を挙げることができる。学科目別の研究が進みつつあることを示すものであるが、「国語科」については依然として目立った研究は現れていない。
- 4) 小林忠雄『文検国語科精義』東洋図書、1935年、478-479頁を参照。
- 5) 西川良一『文検国語科の新研究』文泉堂書房、1935年、257-258頁。
- 6) 前掲『文検国語科精義』、187-188頁。
- 7) 同前、188頁。
- 8) 「教育ノ大意」は、1907（明治40）年の文部省訓令によって設けられ、1909（明治42）年の第23回試験より実施された。中等教員が「教育学ノ大要」に通じていることが必要とされたことから行われた措置であり、予備試験に位置づけられることとなった。（寺崎昌男、「文検」研究会編『「文検」の研究—文部省教員検定試験と戦前教育学—』学文社、1997年、84頁を参照。）
- 9) 前掲『文検国語科精義』、242-243頁。
- 10) 吉波彦作著『文部検定国語漢文受験要訣』啓文社、1926年、31頁。

（資料）「文検国語科」試験問題（1885年～1934年）

◆「設問」の部

第1回（明治18年）

- 1 牽ト云フ語ハ如何ナル意味ナルヤ且ツ作用言中幾段ノ活用ヲ為スヤ。
- 2 里はあれて人の？ふりにし宿なれや庭もまがきも秋の野らなる  
右ノ歌ノ係り結ビハ如何。
- 3 作用言ノ中変格ノ種類及び其格中ノ語数幾何アリヤ且ツ其行四段ノ中用法ノ異ナル詞幾何アリヤ。
- 4 作用言ノ中毎段変格共使令ノ詞ノ用法ハ如何。
- 5 （本文略）  
右文中ノ誤リヲ正スベシ。

第2回（明治19年）

- 1 鶉、蛙、雀、鼠、瓦、器、杖、笛、苗、竿  
右、十字に訓をつくべし
- 2 帚はは、きなるをはうきとも書くは如何なるゆゑぞ
- 3 春毎に心をそむる花の枝にだれがなほざりの袖やふれつる
- 4 故里へゆく人あらばことづてんけふ鶯の初音き、しと  
右、二首の歌のあやまりを直すべし
- 5 作用言の中の四段言を命令につかふ時はいかなるいひかたにするかまた四段言の命令のいひかたはてにをはの結び辞となることありや

第3回（明治20年）

- 1 短、虹、梶、躑躅、蚯蚓、法師、格子  
右、訓の仮名をつくべし
- 2 小路は古来こうちと書き日向は古来ひうがと書く  
右、何故にうと書いてふとは書かぬか其説明をすべし
- 3 思ふ事千枝にや繁し呼子鳥そのだの森の方に鳴くなる
- 4 出づるとも入るともなく足引の山の尾上にすめる月かな

- 右、二首の歌のあやまりを直すべし  
指点して其正誤をつくべし
- 5 はたらかす、生く  
右、二語何段の活用といふ事を説明すべし

第4回（明治21年）

- 1 く（来） す（為）  
右二つの語の活用を説くべし
- 2 もみぢばをさこそあらしのはらふらんこのやまもとはあめと降るなれ
- 3 おのづから思ひいづともかひぞなき契りしま、この、ろならずば
- 4 日にそへてふしたちにけりわが園のたけの小枝のうぐひすのこゑ  
右三首の歌の誤を指すべし

第5回（明治24年）

- 1 左の歌についててにをはの調不調を説明すべし  
(い) つくばねの峰までかゝるそら雲を君しもよそにみるは何なり  
(ろ) 春がすみたなびく田居にいほりしてあき田かるまで思はしむらく
- 2 左の歌についてうすみとふりみふらずみとの区別を説明すべし  
(い) 春のきるかすみのころもきぬをうすみやま風にこそみだるべらなれ  
(ろ) 神無月ふりみふらずみさだめなきそぐれぞ冬のはじめなりける
- 3 左の歌について過去現在などといふ時の調不調を説明すべし  
(い) 花見にとゆかましものを春がすみたなびく山のかひなかりけり  
(ろ) 誰が方になびきはて、かひじのねのけぶりの末のみえざるらん
- 4 左の歌についててはのはは清濁いづれにすべきかを説明すべし  
(い) みちのくにありといふなるなとり川なき名とりてはくるしかりけり  
(ろ) うめが香を袖にうつしてとゞめては春はすぐともかたみならまし  
右答案の末に熟読及び看過せし語学書名を列記すべし

第6回（明治26年）

- 1 左の歌についててにをはの調不調を説明すべし  
(い) ひとよりもこゝろのかぎりながめてし月はたれともわかじものゆゑ  
(ろ) ほとゝぎす峰の雲にやまじりにしありとはきけどみるよしもなき
- 2 左の文について詞づかひの調不調を説明すべし  
(い) 玉はたとひ竜のあぎとにみいでしともそれ得るべき術のなからましかばいかでかはそのかひあらん  
(ろ) 硯もかわかせず夜毎にてならふまゝ、にいつしか消息をまかよはするほどになりけり
- 3 左の文について時または自他などの調不調を説明すべし  
(い) かの神龍をとらへては我また害せられなましくこそとらへ得ずはなりにけれ  
(ろ) 和歌はひとつこゝろを種としてよろづのことはとぞなれりける  
右答案の末に熟読及び看過せし語学書名を列記すべし

第7回（明治27年）

- 1 左の文について天爾乎波の調不調を説明すべし  
手かくわぎは文字のひとつにて上代は殊にすぐれたりしをいつの頃よりや漸くすたれて今はふつに学ぶ人だになくなりしあわれ盛衰の理はたゞ人のうへのみにはあらじかし
- 2 左の二首の歌について詞づかひの調不調を説明すべし  
(い) ゆくさきもみえぬ波路に船出して風にもまかす身こそうきたれ  
(ろ) 法のみちゑば ふみわけて吉野の宮に いりにしを などかあらしのおちかへり 志賀山ざくら ちらすらん
- 3 左の十字に字音の仮字をつくべし  
氷 火 僧 章 勝 納 信 心

孝 公

4 左の四条の間に答ふべし

(い) 有りといふ作用言を何故に変格の活用といふか

(ろ) とといふ天爾乎波はいかなる時に連体言をうくるか

(は) 現在の時をあらはす作用言はいつも現在の一箇のみをあらはすか

(に) 音便の仮字をいうとするはいかなる故か

右答案の末に熟読及び看過せし語学書名を列記すべし

第8回 (明治28年)

1 動詞自他の弁

2 テニヲハの定義を与へかつ其分類を示せ

3 維新以前の有名なる国語学者三名を挙げその略伝と学説の一斑とを記せ

4 平安、室町、江戸各時代文学の特質を略述せよ

(国語教授法問題)

1 作文の採点は如何なる標準に拠るべきか

2 読方教授の方法及び其目的

3 読書科と作文科とは如何にして連絡せしむべきか

4 尋常師範学校、尋常中学校、高等女学校の国語科時間各々四学年間毎週四時と見做し学科目及び教科用書の配当表を作るべし

(受験者ハ第一第二第三ノ三問ノ中其二ヲ撰ブコトヲ得)

第9回 (明治29年)

1 母音、子音、促音、拗音の定義を与えよ

2 に、へ、と、の、が、も、を、のあらゆる用法を示せ

3 枕詞の性質を説き併せて之に関する参考書を列挙せよ

4 語学の発達を略述せよ

5 左の書は如何なる事柄を記せるものぞ

歴朝詔詞解 金塊和歌集 扶桑拾葉集 藩翰譜 和漢朗詠集

6 左の人々の文学上の事蹟を問ふ

源隆國 一条兼良 北村季吟 貝原益軒 瀧澤馬琴

7 長歌、短歌、旋頭歌、今様歌の形式を問ふ

8 書牘文は如何にして発達せしか

第10回 (明治30年)

【予備試験】

1 左の漢字に國訓を施せ

数 依 鬼 菴 笈 双 楫 醉  
鶺 鬻 潮 教 籤 氏 葛 屑 瓦  
犯 竿 蝙蝠 紫陽花

2 左の漢字に漢語音を附しその用例を示せ

京 右 奴 行 留 圖 慧 皇  
女 人 宗 男 武 定 明

3 助動詞を分類してその用例を示せ

4 本邦助辞沿革の一斑を述べよ

5 左の人々の文学上の事蹟を問ふ

藤原俊成 石川雅望 村田春海 藤原公任 安藤爲章

6 左の書の記載事項と編著者の名とを挙げよ

奥の細道 花月草紙 新葉和歌集  
古今著聞集 古今和歌六帖

7 連歌とは如何なるものぞ

8 元禄時代の文学の状態を略述せよ

【本試験】

1 国学者の伝記を知らむには如何なる書を見るべきか

2 公事、衣冠、軍器のことを知らむには如何なる書を見るべきか

3 土佐日記と古今集の序とを比較論評せよ

4 読書科教授をして最も興味あらしむる方案如何

第11回 (明治31年)

【予備試験】

1 左ノ文章ニ就キテ品詞ノ種類文章ノ構造ヲ説明セヨ

見じといふ人こそうけれ山里の折かけ垣の梅をだに情なしと惜みしに今更薪になるべしとかねて思ひきや

2 左ノ語ニ仮名ヲ施シ意義ヲ説明セ

ヨ

青侍 遠侍 年官年爵 引出物 切米 綾 桑門 御盤降 檀越 冥加

3 左ノ人名ヲ漢字ニ写シ且ツ其時代ヲ挙ゲヨ

カタノアヅママロ ヤマノヘノオクラ モトヲリノノリナガ オホトモノ ヤカモチ ケイチウアジャリ

4 左ノ書ヲ解題セヨ

うけらが花 本朝文粹 吾妻鏡 玉葉集 男信 同文通考 南留別志 安齋随筆 菟久波集 蜻蛉日記

【本試験】

筆記試験無し

第12回 (明治32年)

【予備試験】

(文法)

1 かなづかひ法のおこれる所以を問ふ

2 方言の性質を略述せよ

3 明治以前に成れる語学書の重なるもの五種を挙げよ

4 左の文章中に誤謬あらば之を指摘しかつ其の理由を述べよ

(い) 室内にては高声に談話を禁ず

(ろ) その誠忠大に人を感ずるものあり宜なるかな芳名々々として後世に伝ふるや

5 左の文章を文章法の上より解剖せよ

炎治あまた所になりぬれば神事に穢ありといふことは近く人のいひ出せるなり

(文学史)

1 足利時代の文章の概略を述べよ

2 歌学に関する書五種の名と其の著書の名とを挙げよ

3 俳諧歌と俳諧との別如何

4 三鏡を解題せよ

5 左の人名を時代の順序に配列せよ  
藤井高尚 藤原爲兼 都良香 小澤蘆庵 紀時文 藤原基俊 仙覚律師

【本試験】

(師範学校中学校高等女学校国語科用読本には差異を立つる必要ありや)

第13回（明治33年）

【予備試験】

（文学史）

1 国文学に影響せる漢文学の書三種を挙げよ

2 源氏物語の後世の文学に及ぼしたる影響如何

3 左の天皇及び士庶の文学上に於ける事蹟を問ふ

後鳥羽院 戸田茂睡 京極黄門 林述齋 善相公

4 徳川時代に現はれたる国語上の辞書を挙げよ

5 明治以後の文章にして普通文の模範たるべきものを挙げよ

（文法）

1 左の文句中の誤謬を正し併せて其理由を説明せよ

（い）来（キ）しかた行末のみ案ぜられて……

来（コ）しかた行末のみ案じられて……

（ろ）甲氏は体格つよしや否や

甲氏は体格つよきや否や

甲氏は体格つよきか否や

甲氏は体格つよきか否か

（は）余り規則に拘泥さるゝはよろしからざるやに聞及び候

（に）図書の検査を了るときは一々之に検印を附す例なるも時々は之を略すこともなきにはあらずといふ

2 左の歌文の主語並に説明語を指示せよ

（い）世のうきも人のつらさも忍ぶるに恋しきにこそおもひわびぬれ

（ろ）彼等が首を正行正時が手にかけて取り候か正行正時が首を彼等にとられ候か

3 左の文句中の國、妻の二語は全く同格なりと認めて可なるや否や之を詳説せよ

法然國を去る

友人妻を去る

4 亘爾乎波研究に関する書籍中重要なもの三種を挙げよ

5 左の文章を国語の法則に拠りて書下にせよ（女子の受験者には之を省く）

（問題文略）

【本試験】

（1～3は解釈問題）

4 左の二文の意義の異同を説明せよ  
いかになりたまひにきとか人にもいひ侍らむ

いかになりたまひしと人にもいひ侍らむ

5 左の歌の係結を詳細に批評せよ  
山里にたれをまたこはよぶこ鳥ひとりのみこそすまむとおもふに（山家集）

第14回（明治34年）

【予備試験】

1 言語学の効用を略述せよ

2 文語の動詞の活用と口語動詞の活用とを対照して其の関係を述べよ

3 左の文字の用法を説明せよ

（い）又 亦 復

（ろ）則 即 乃 輒

4 左の文章の構造を説明せよ  
吾が郷神戸にうそ鳥多くきたり庭の梅竹軒ちかき枝までこの鳥ならぬところなかりき

5 左の人々の文学上の事蹟を問ふ  
宗良親王 歸震川 三蘇 太安万侶

【本試験】

3（1～2は解釈問題）左の歌に文法上の誤謬あらば其の理由を附して説明せよ

うめがかをそでにうつしてとめてははるはすぐともかたみならまし

4 左の語の差別を説明せよ

見す 見さす 見せさす

第15回（明治35年）

【予備試験】

1 用の字の活き方に幾種類あるか、その孰れが正しき。

2 左の文章の品詞を区別し且つ活用ある語はその種類と段とを指示せよ。

ゑやせましせずやあらましとおもふことはおほやうはせぬがよきなり

3 左の人々の文学上の事蹟を問ふ。

元好問 李夢陽 本居春庭 大伴家持

4 左の書籍を解題せよ。

説文解字 山口栞 続世継 名物六帖 文選

【本試験】

1 口語と文語につき尊敬及び謙遜の意をあらはす語法を説明せよ。

2 文法と美辞学との関係を問ふ。

3 徳川時代における小説の沿革を説き且重なる書籍と作者とを示せ。

第16回（明治35年）

【予備試験】

1 左の歌を文章上より解剖せよ

世の中にあらまほしかほと思ふ人なきが多くもなりにけるかな

2 左の歌中の「ながら」といふ語を説明せよ。

彼は書を読みながら道をありく。

人道を唱へながら掠奪を事とす。

光秀は皮ながら粽を食へり。

3 鎌倉時代の著名なる文学書三種を挙げて解題せよ。

4 諧声文字と会意文字との区別を説明し且つ二三の実例を挙示せよ。

5 孟荀学説の異同を略述せよ。

（女学校のみ教員志望者は第四、第五問に答ふるを要せず）

【本試験】

（漢文の部）

1 詩体の種類につきて知る所を挙げよ。

2 故事成語を調ぶるに必要な参考書を挙げよ。

3 左の文章を漢文に復すべし。

（問題文略）

（国語の部）

1 名詞及動詞は文の如何なる成分として用ひらるゝか其種々の場合を挙げよ。

2 連歌、狂歌、狂詩、今様歌に付いて知れる所を記せ。

3 動詞助動詞を教授する順序方法を述べよ。

4 中古文と普通文との主要なる差別

は如何なる点にあるか。

第17回 (明治36年)

【予備試験】

1 左の文の傍線を施したる語を説明せよ。

(イ) やかすとも草は萌えなん春日野をた、春の日にまかせたらなん

(ロ) 桜花散らばをしけん玉ほこの道行ぶりにをりてかざさん。

2 左の文に誤謬あらばこれを正し且つ其理由を説明せよ。

(イ) 露こぼれぬ。露ぞこぼれぬ。

(ロ) 文治二年四月二日のはしを昇りしも八鳥の内の大臣宗盛を生捕り賞と聞ゆ。

ハ、委しく調査を為せしかとも遂に何等の結果をも得ざりし。

3 左の伝説に就きて知れる所を記せ。

眞間手兒名 松風、村雨 阿新丸 竹取翁 浄瑠璃姫

4 詩の六義とは何ぞ。

5 諡、諱、名、號、の別を問ふ。

6 左の文字に音と訓とを附し二音以上有る者は其音に相当せる義を記せ。

(イ) 己 (ロ) 樂

【本試験】

(国語の部)

1 左の歌を作られたる時代を判別せよ

梅の花それとも見えず久方のあまざる雪のなべてふれ、ば

鶯の鳴けどもいまだふる雪にすぎの葉白しあふ阪の山

ほと、ぎすなかなぬ國にも行きてしがそなく声をまてば苦しも

蛸のこゑきく山の近けれやなきつるなべに夕日さすらん

わが宿にさける藤なみ立ちかへりしぎがてにのみ人の見るらん

こと問へよおもひおきつの浜千鳥なくなく出でしあとの月影

2 左の語を解釈せよ。

秀句。片歌。落首。前句附。

根合。

(漢文の部)

1 文学史上に於ける歐陽修

2 支那の人名を搜索すべき辞書二三種を挙げよ。

3 左の語を解釈せよ。

(イ) 詩餘。 (ロ) 樂府。

(ハ) 清談。 (ニ) 壘断

第18回 (明治37年)

【予備試験】

1 左音文を文章法の上より解剖せよ。

(イ) 牛にひかれて善光寺参り。

(ロ) 花より団子。

(ハ) 人間万事塞翁が馬。

2 左の文に誤謬あらばこれを正し且つ其理由を記せ。

(イ) 貝ども拾いつ、うちさはぐ程にやがて汐みつる頃となれば飽かず口おしけれど返りぬ。

(ロ) 火曜と木曜の午後は在宅に候得ば御閑も候はゞ御來社被下度候。

(ハ) この地海に近く白帆を青松の間に隠見して風光絶佳なり。

(ニ) 人に命じて書かしたれば誤をやあらん。

【本試験】

(1~2は解釈問題)

3 次の事項について知れる所を記せ。

古今伝授、川柳、漢和連句。

4 維新以後の文学を概説せよ。

第19回 (明治38年)

【予備試験】

1 左の名称を解釈せよ。

母音。子音。長音。促音。鼻音。

2 動詞の時を口語文語について説明せよ。

3 左の文字の意義を説明し其用例を示せ。

選、撰 篇、編 殉、徇 候、侯 借、譜

5 左の傍線を施したる仮名に適當なる漢字を填充せよ。

顔ををかして諫む。

姓名をかす。

疾にかさる。

6 左の語の意義を説明せよ。

敢不為。不敢為。独不樂。不独樂。

【本試験】

1 左の文を文章法の上より解剖せよ。

(イ) 今の儒者は天朝の故実を知らず夏夷順逆の理に暗くして名を乱り言を紊る百五十年來比々として皆是なり。

(ロ) 執行の時日は地方長官之を指定する。

2 文部省文法許容案とはいかなるものぞ。

3 左の事につき知れる所を記せ。

東遊。催馬樂。延年舞。田樂。浄瑠璃。

4 元稹、白居易につきて知れる所を記せ。

5 左の書籍につきて知れる所を記せ。

論孟の註釈書

漢文典に関する書籍

第20回 (明治39年)

【予備試験】

1 左の語につきて音韻の変化を變明せよ。

なんなんとす。とほたうみ。

いはゆる。

2 左の語につきて動詞と形容詞との區別を説明せよ。

有り 無し 静かなり

3 抒情詩、叙動詩、戯曲詩の區別如何。

4 弘法大師、日蓮上人の時代に於ける国文学の状況如何。

5 詩の古体と近体との區別を説明せよ。

6 六書の區別及其实例を示せ。

7 左の人々を時代の順に配列せよ。

駱賓王、陳思王、朱?尊、陸放翁、李夢陽、昭明太子、謝靈運、李? 宗景濂

【本試験】

1 小学校に於ける文法の教授案を示せ。

2 文法と修辭学との限界如何。

3 左の書を解題せよ。

和字正濫抄。 和訓栞。 悦目抄。  
玉霞。 歌袋。

- 4 朱陸學術の異同。
- 5 左の文を文章法の上より解剖せよ。  
古者言之不出耻躬之不逮也。

第21回（明治40年）

【予備試験】

- 1 次の各項の書名を列記せよ。  
(イ) 六国史 (ロ) 三代集 (ハ) 四鏡 (ニ) 春秋三伝 (ホ) 六経
- 2 延喜天曆時代の国文の状況如何。
- 3 左の事項につき参考すべき書目をあげよ。  
(イ) 皇国の御系図 (ロ) 徳川時代の女子の服装

4 左の文を(文?)章法の上より解剖せよ。

(イ) 知らざるを知らずとせよ是れ知れるなり

(ロ) 物言へば唇寒し秋の風。

- 5 清初學術の状況如何。
- 6 支那歴代の国号を時代(順?)に記せ。

【本試験】

- 1 歌論に関する書数種を挙げよ。
- 2 左の人々の語学上の事蹟を述べよ。  
富士谷成章。 本居春庭。 鶴峰戊申。 中島廣足。
- 3 左の名称を説明せよ。  
宇治十帖。 古今六帖。 相聞。 東歌。 和讃。 組歌。

4 左の音韻学上の名称を説明せよ。  
清音。 濁音。 摩擦音。 破裂音。

5 名詞と副詞との差異を述べて左の縦線ある語の品詞を論定せよ。

沅湘日夜寒に流れ去りて愁人の為に住ることしはらくともせず。

- 6 支那の制度に関する参考書を挙げよ。
- 7 曹大家蔡文姫につきて知れる所を記せ。
- 8 七言絶句につきて平仄韻字の排列を記せ。

第22回（明治41年）

【予備試験】

- 1 左の語の読方を問ふ。  
盤渉調。 豊楽殿。 春宮大夫。  
柏。 直衣。 母屋。 除目。 歌合。 万里小路。 流鏑馬。

2 左の語を説明せよ。  
衆議判。 旋頭。 序歌。 浮世草子。 宣命。

3 左の熟語を説明せよ。  
格物致知。 徑庭。 函丈。 良知良能。 度支。

4 左の文法上の名称を説明せよ。

音便。 副詞。 修飾語。

5 唐宋に於ける古文復興の始末を略記せよ。

【本試験】

(注意) 第二種受験者は設問の(五)(六)に答ふるを要せず。

1 左の圈点を附したる語を品詞上より解剖せよ。

(イ) 心あてに折らばやをらん初霜のおきまどはせる白菊の花。

(ロ) うゑし植ゑば秋なき時や咲かざらん花こそ散らめ根さへ枯れめや。

2 左の文を文章法の上より解剖せよ。  
この殿には後夜に卯酒のさかなには只今殺したる雉をぞ参らせける。

3 神楽歌、催馬楽に関する註釈書をあげよ。

4 俳句と川柳との区別如何。

5 左の人名につきて知れる所を記せ。  
庾信 李夢陽

6 左の文中の之の字の用法を区別せよ。

自誠明謂之性。自明誠謂之教。(中庸)  
博愛之謂仁。行而宜之之謂義。(韓文原道)

7 左の句を漢訳せよ。  
(イ) 氷は水より寒し。  
(ロ) 病は口より入る。  
(ハ) 彼は此より善し。  
(ニ) 生民より以来未だ孔子より盛なるはあらず。

第23回（明治42年）

【予備試験】

1 左の語を説明せよ。

衣冠。 束帯。 宰相。 相国。 公卿。 公家。 宣旨。 令旨。 堂上。 地下。

2 本居宣長の学問上における事蹟を略叙せよ。

3 左の文を文章法の上より解剖せよ。  
さしたる事なくて人がり行くはよからぬ事なり用ありて行きたりとも其事はてなばとくかへるべし久しく居たるいとむつかし。

4 左の書につきて知れる所を記せ。  
文心彫龍。 通鑑綱目。

【本試験】

1 係辞ありて結辞なき場合を挙げよ。

2 左の文の誤を正して其の理由を述べよ。

(イ) 雉子も鳴かねばうたれまじ。

(ロ) 僅の費へを厭ふて大なる功を空しふするな。

3 左の書につきて知れる所を記せ。  
拾芥抄 東雅 令義解 懷風藻 紐鏡

4 左の人々につきて知れる所を記せ。  
安原貞室 浅井了意 藤原家隆 伴信友 屋代弘賢

5 左の語を説明せよ。

隻声 疊韻 連句

6 大学の三綱領を挙げよ。

7 漢籍の解題に関する重要な書名を挙げよ。

第24回（明治43年）

【予備試験】

1 鎌倉時代の文学の概況を記せ。

2 左の語を説明せよ。

(イ) 校倉 盤渉調 縣召除目 直会 牛頭馬頭の呵責

(ロ) 抽象 対象 概念 人格 散文詩

3 左の名目を説明せよ。

音便 助数詞 副詞句 修飾語

4 周末の諸学派と之に属する学者の名とを挙げよ。

5 平安朝時代の詩文集数種を挙げよ。

【本試験】

1 左の書の成れる時代を問ふ。

新勅撰集 蜻蛉日記 岷江入楚 紫  
家七論 月の行方 桂園一枝 古事記  
古今著聞集 靖獻遺言 和名抄

- 枕詞の文学的価値如何。
- 自動詞他動詞を説明し左の語の孰れに属するかを論ぜよ。  
心の欲する所に従ひて矩を踰えず。  
青柳絲を乱る。  
何の仕出づる事もなし。  
其是非を知らずといふ。
- 孔子の四科四教を挙げよ。
- 左の人々の時代と著書とを挙げよ。  
趙翼 王弼 孔穎達 朱彝尊

第25回 (明治44年)

【予備試験】

- 仮名の発達に就きて知れる所を記せ。
- べし、らる、や、に、と、の種々の用例を列挙せよ。
- 左の語を説明せよ。  
連枝 散策 掣引出 究竟 笑止  
荒涼 散位 娑婆 修羅 雑色
- 左の人々の文学上の事蹟を問う。  
源親房 小澤蘆庵 林羅山 柳亭種彦 三善清行
- 左の語の意義を問ふ。  
風雅頌 起承転合
- 左の書に就き知れる所を記せ。  
太極図節 玉台新咏

【本試験】

- 左の人々に就きて知れる所を記せ。  
谷川士清 荒木田麗女 伊藤東涯  
建部綾足 平賀源内 藤井高尚 肖柏山崎闇齋
- 左の語を説明せよ。  
科白 歌劇 句題 脚本 物名 賦物
- 左の文を文章法の上より解剖せよ。  
東洋の一大強国世界有数の軍国を以て自ら居る日本が財政上に於いては欧州二等国より劣等なる地位に就かざるべからざるが如き根本の原因は果して何にあるか。
- 左の書につき知れる所を記せ。  
小学 鍾嶸詩品 唐六典

- 左の事項に就いて知れる所を記せ。  
三綱五常 魏晋の清談

第26回 (大正元年)

【予備試験】

- 国文学に於ける韻文の形式を説明せよ。
- 釈契沖の仮名遣に関する意見を述べよ。
- 左の動詞の活用を示せ。  
考 報 堪 用 栄 悶  
据 教 抑 誣
- 左の語を略解せよ。  
申文 節折 采女 頭陀  
胡散 擲手 官憲 法人 人為淘汰 群集心理
- 左の年号は何朝何帝の時なるか。  
万曆 慶曆 建安 開元
- 左に就きて知れる所を記せ  
姚江学 桐城派

【本試験】

- 明治時代に歿せし文学者二三人の名を挙げてその事業を略述せよ。
- 祝詞と宣命とを比較論評せよ。
- 左の場合における品詞転成の例を示せ。  
(イ) 名詞より動詞に (ロ) 動詞より副詞に  
(ハ) 名詞より形容詞に
- 左の事項に就きて知れる所を記せ。  
漢代に於ける国郡県の区別 唐代の節度使
- 文章上の隻關法を説明せよ。

第27回 (大正2年)

【予備試験】

- 謡曲に就いて知れる所を記せ。
- 欧州語より転化して我国の通用語となれるもの若干を挙げよ
- 左の文の縦線を施したる部分を品詞上より解剖せよ。  
万里の長城未だ全く成らずして山東既に乱れ坑灰なほ温にして咸陽の宮殿三月紅なりあはれ万世無窮と期せし始皇が遺囑も忽ち二世にして尽きぬ盛なる者豈竟に久しからんや

- 左の語を解釈せよ。

起請 怠状 命婦 家司  
優婆塞 連想 対照 暗示  
本能 不文法

- 絶と律との特質を問ふ。
- 十八史略の名称の由来を説明し併せて書中秦以後の国号を列記せよ。

【本試験】

- 左の書に就きて知れる所を記せ。  
群書一覽 玉葉集 新葉集  
金塊集 俚言集覽 詞の通路
- 左の人物に就きて知れる所を記せ。  
松永負徳 伊勢貞丈 出口延佳  
石川雅望 源順 阿佛尼
- 左の文を文章法上より解剖せよ。  
夕さり大納言斬られ候はんには成生生きても何にかはし候ふべきなれば唯一所で如何にもなるやうに申してたはせ給ふべうも候ふらん
- 三礼に就きて知れる所を記せ。
- 類書の性質を略述し併せて其の二三の書名を挙げよ。
- 二三の例を挙げて簡単に反切の法を説明せよ。

第28回 (大正3年)

【予備試験】

- 左の語に就きて知れる所を記せ。  
東鑑 悦目抄 草庵集 文芸類纂 詞の玉緒
  - 左の語の読方を記し簡単に其の意義を説け。  
律令格式 公卿 法会 精進  
上臈 続松
  - 助動詞助詞の意義用法を例を挙げて説明せよ。  
(イ) つ (ロ) らん ハ、ぬ  
べし ニ、さらし ホ、は  
へ、が
  - 左の人に就きて其時代及文学上の特別の事蹟を記せ。  
李夢陽 劉歆
  - 左の書に就きて知れる所を記せ。  
近思録 唐宋詩醇
- 【本試験】
- 俳文につきて知れる所を記せ。

2 左の語句の意義を解け。

六日の菖蒲 いさかひ果ててのち  
ぎりき 横紙破り 秘事はまつげ  
えてに帆をあげる

3 文章法の上より左の歌を解剖せよ。

世とともに峯へ麓へおりのほり行く  
雲の身は我にぞありける

4 正史編年史紀事本末の三史の区別を略述して各一二の例を挙げよ。

5 漢学と宋学との特色を概説し、代表的学者の名を挙げよ。

第29回（大正4年）

【予備試験】

1 左の人々に就きて知れる所を記せ。

安藤年山 屋代弘賢 藤井貞幹  
四方赤良 清原元輔

2 左の語の読方を記し簡単に之を説明せよ。

内舍人 門跡 廻立殿 白酒  
黒酒 五節 准三宮

3 左の文中の用言を抽出しその活用を示せ。

たとしへなくながめしをれさせ給へる  
夕ぐれに沖の方にいとちひさき木の  
葉の浮べると見えて漕ぎくるをあまの  
釣船かと御覧するほどに都より御消息  
なりけり（増鏡）

4 大学中庸の表章せられたるに就きて知れる所を記せ。

5 刑名学の意義を述べて其の著名なる人を挙げよ。

6 漢文の倒装法の例を挙げよ。

【本試験】

1 平安文学と漢文学との関係に就きて知れる所を記せ。

2 新井白石の著書の主なるものを挙げよ。

3 左の文章を文法上より解剖せよ。

此の者さして猛き者とは見えず思ふに  
狐狸のしわざにてぞあるらんこれを射も  
殺し斬りも止めたらんはむげに念なから  
まし同じく生擒にせん

4 主格をあらはす種々の助詞を文例により示せ。

5 詩の六義を略述せよ。

6 楽府の起源及び其の体裁を略述せよ。

7 濂洛關?の学とは何人の学と称するか。

第30回（大正5年）

【予備試験】

1 左の人々に就きて知れる所を記せ。

太安麻呂 西山宗因 上田秋成  
一條兼良 高崎正風。

2 左の書籍の主なる註釈書の書名と著者とを記せ。

万葉集 源氏物語 枕草子。  
古今集 徒然草。

3 左の文中の動詞、助動詞を抽出し其活用を示せ。

三位討たれしと聞きしかども今朝ま  
では誠とは思はでありつるが此暮程より  
げにさもあらんと思ひ定めてあるぞとよ。

4 左の事項に就きて知れる所を記せ。

寛政の三博士、

5 支那に於ける論語の註釈書三種以上と著者とを記せ。

【本試験】

1 徳川時代に於ける左の各種の文章の性質を述べよ。

和漢混淆文。擬古文。俳文。  
狂文。

2 左の発句の修辞上の技巧を説明せよ。

(イ) 船となり帆となる風の芭蕉かな。

(ロ) 木枯に二日の月の吹き散るか。

ハ、行く秋や手を広げたる栗のいが。

3 左の文を文章上より解剖せよ。

(イ) 上も御涙の隙なく流れおはします。

(ロ) 優なりなりと覚ゆるばかりす  
ぐれたると取る方なく口惜しきとは数  
ひとしくこそ侍らめ

4 左の事項を説明せよ。

孟子の四端説。詩の古体と近体。

5 左の事項につきて知れる所を記せ。

陸象山の学説の梗概。伊藤東涯の著書。

第31回（大正6年）

【予備試験】

1 韻文の価値を判断すべき標準につき述べよ。

2 議論文と説明文との区別及其關係を述べよ。

3 左の文中の動詞、助動詞を抽出し其活用を示せ。

栗田殿の「いかにおほしならせおは  
しまぬるぞ。只今過ぎさせ給は、おの  
づから障も出でもうで来なむ」とそら  
なきし給へるはこの時ぞかし。

4 左の文に誤あらば之を正し、且つその理由を略記せよ。

孔子周に行き、礼を老子に問ふて大  
ひに得る所ありしと云ふ。

5 儒教に於ける義利の弁につきて意見を述べよ。

6 相城派の主要ある人名を挙げよ。

【本試験】

1 左の著作及び人物に就きて知れる所を記せ。

山口栞。後拾遺集。怜野集。本  
朝文粹。岷江入楚。林信勝。藤原  
公任。菅原孝標女。竹田出雲。

2 大鏡にあらわれたる貴族生活を概説せよ。

3 左の文を文章法上より解剖せよ。

五月雨の短夜に寝ざめしていかで人  
より先に聞かんと待たれて夜深く打出  
でたるに郭公の声らうらうじう愛敬づ  
きたるいみじう心あくがれてせんかた  
なし。

4 格物致知の意義を問ふ。

5 白楽天に就いて知れる所を記せ。

第32回 大正7年

【予備試験】

1 徒然草の所説に矛盾ありと云ふは如何なる点なるか、又其の矛盾は如何に之を解釈すべきか。

2 縁語。切字。黄表紙。合卷。平面描写。印象批評。

3 左の助動詞及び助詞の種々の用法を例を挙げて説明せよ。

ぬ。まし。らる。しか(欲望)。な(禁止)。

- 4 王陽明の良知説に就きて知れる所を記せ。
- 5 青苗の法を略説せよ。

【本試験】

- 1 尊皇精神を内容とせる我が国の文学に就いて知れる所を記せ。
- 2 叙事詩、抒情詩、劇詩の区別並に其関係を説明せよ。
- 3 左の文を文章法上より解剖せよ。  
おきなまろいづく命婦のおもとくへといふに、まことかとしてしれものはしれか、りたればおびえまどひてみすまの中に入りぬ。
- 4 下の語の意義を問ふ。  
居敬窮理
- 5 楚辭について知れる所を記せ。

第33回 (大正8年)

【予備試験】

- 1 左の文を品詞上より解剖せよ。(用言には活用及法(形段)をも記せ。)  
かくあやなき業の出で来ぬるはこの世一つの事にもあらざらめども迷のおろかなる前にはなほいとあやしかし。
- 2 口語の主格助詞「が」「の」の別及動詞「ある」「をる」の別を例を挙げて説明せよ。
- 3 左の修辭学上の名称を例を挙げて説明せよ。  
隱喩。調和。擬人。漸層。
- 4 孟子の知言養氣説を略述せよ。
- 5 物徂徠の文学につきて知れる所を記せ。

【本試験】

- 1 源氏物語と枕草子に就きて比較論評せよ。
- 2 京伝と馬琴につきて記せ。
- 3 左の文を文章法上より解剖せよ。
- 4 左の語の意義を問ふ。  
博文約礼
- 5 文選に就きて知れる所を記せ。

第34回 (大正9年)

【予備試験】

- 1 左の文章を口語に訳し、相対照して口語法と文語法との異なる所を説明せよ。

勝海舟壮時西洋式の兵術を学びけるが一書肆の店頭を過ぎしに舶載の兵書あり。当時得難き良書なり其価を問へば「五十両なり」と云ふ海舟之を購はむと欲すれども家貧にして直ちにその金を弁ずること能はず。

- 2 我国における甲冑装束及び官職に就きて参考書を示せ。
- 3 人心道心の意義を述べよ。
- 4 三蘇につきて知れる所を記せ。

【本試験】

- 1 八大集の書名を選集の年代順に列記せよ。
- 2 新井白石谷川士清本居春庭の語学上に於ける事蹟を記せ。
- 3 我国現代の文学にあらはれたる思想上の傾向に就いて述べよ。
- 4 支那に於ける性の説の梗概を記せ。
- 5 陶淵明に就いて知れる所を記せ。

第35回 (大正10年)

【予備試験】

- 1 左の文の誤を正し其の理由を略記せよ。

口は食物を入れる関門にして之を掩う唇堅き齒柔き舌等はいはゆる発音機関なり。吾人は之によりて自在に思想を語ることを得る。言語は思想を通ずる大切なものなれども妄に用ゆれば不測の禍を招くことあり。

- 2 左の動詞助動詞の活用を示せ。

肥 堪 支 率 恋 恨  
らる ぬ べし まじ

- 3 左の名称を説明せよ。  
今様 落首 俳諧 物名 歌枕
- 4 克己復礼の意義を述べよ。
- 5 司馬遷班固に就いて知れる所を記せ。

【本試験】

- 1 文学上より平家物語を論評せよ。
- 2 左の文を文章法上より解剖せよ。  
生物進化の事実なることは己に十九

世紀の後半の研究によつて全く確実となつたから今世紀に入つてからは真理を応用して直接に人間社会を利することに計画する人が追々と出来た。

第36回 (大正11年)

【予備試験】

- 1 左の文中の動詞形容詞助動詞を抽出して其の活用を法(段)に当て、表示せよ。

其の子家継は父には似ず大剛の者にて敵数多撃取つて引きにけるが父が馬は射られて伏しぬ主はなし生捕られにけりと思ひて無念なれば只ひとり取つて返し多くの敵を斬伏せて或兵と引組んで落ち刺違へて死しけり

- 2 左の人々の年代を示しその著作物の名を知れる限り挙げよ。

一条兼良 尾崎紅葉 紀貫之  
賀茂真淵 北村季吟

- 3 左の名称に就いて知れる所を記せ。

(イ) 道家 名家 法家

(ロ) 四六文

【本試験】

- 1 源氏物語と枕草子とを比較論評せよ。

- 2 左の文を文章法上より解剖せよ。

未成年者が其の飲用に供する目的を以て所有し又は所持する酒類及其器具は行政の処分を以て之を没収し又は廃棄其の他の必要なる処置を為さしむることを得

第37回 (大正11年)

【予備試験】

- 1 左の文を品詞に区別せよ。

まさをさんそんなにうちにはかりみないでちつと外へおいでなさいいつしよにあそびませう。

- 2

(イ) 左の歌集の著者を挙げよ。

金塊集 山家集 うけらが花  
桂園一枝

(ロ) 左の名数について説明せよ。

四鏡 六国史 国学四大人  
六歌仙

- 3 左に就きて知れる所を記すべし。  
 (イ) 文選 (ロ) 唐詩選  
 (ハ) 人心道心

## 【本試験】

- 1 言語と文字との関係を簡単に説明せよ。  
 2 室町時代の文学の特質を記せ。

## 第38回（大正12年）

## 【予備試験】

- 1 左の人々の著作に就いて所見を記せ。

高山樗牛 徳富蘇峰 有島武郎  
 芥川龍之介

- 2 左の文中の動詞形容詞助動詞を抽出し其の活用を法（段）に当て、示せ。  
 あないみじとて雪打払はせ給へりし御もてなしこそいとめでたかりしか御袍は黒きに御単衣は紅の花やかなるあはひに雪の色ももてはやされてえもいはずおはしましものかな（大鏡）

- 3 左に就いて知れる所を記せ。

(イ) 白居易 元稹  
 (ロ) 近思録 伝習録

## 【本試験】

- 1 左の人々を論評せよ。  
 西行 兼好 芭蕉
- 2 左の諸項に就いて知れる所を記せ。  
 鉢の木 道中膝栗毛 小説神髓 浮雲
- 3 左の文を文章法上より解剖せよ。  
 世にあればこそ望もあれ望の叶はねばこそ恨もあれしかじうき世を厭ひ誠の道に入りなむには

## 第39回（大正12年）

## 【予備試験】

- 1 語尾、語句、語幹につきて説明せよ。  
 2 左の書籍につきて知れる所を説明せよ。

国歌大観 古事類苑 国文註釈全書 古今著聞集 東関紀行

- 3 左の文章の構造を説明し文中の用言の活用を表示せよ。

知らず生れ死ぬる人何方より来りて

何方へか去る、知らず仮のやどり誰が為に心を悩まし何によりてか目を悦ばしむる

- 4 左につきて知れる所を記せ。

頼襄の日本外史 張載の西銘

## 【本試験】

- 1 近松門左衛門の芸の説と本居宣長の物語の説とに就て述べよ。  
 2 形象文字と音標文字とに就きて説明せよ。  
 3 官職、服飾、武器に関する参考書を挙げよ。

## 第40回（大正13年）

## 【予備試験】

- 1 左の人物及著作の時代を問ふ。

松永貞徳 曾根好忠 玉勝間

四方赤良 頓阿 落窪物語

菟玖波集 正岡子規 大和物語

折焚柴の記 たけくらべ 日本

永代蔵 東上縁 性霊集 北村

透谷

- 2 左の文中の動詞形容詞助動詞を抽出して其の活き方を法（段）に当てて示せ。

凡保元平治より以来乱りがはしさに頼朝と云ふ人もなく泰時といふ人もなからましかば日本国の人民いかなりなましこのいはれをよく知らぬ人は故もなく皇威の衰へ武備のかちにけると思へるは誤りなり

- 3 左の事項に就きて知れる所を記せ。

(イ) 魏の曹操父子の文学上に於ける事蹟

(ロ) 知行合一

- 4 左の文を鑑賞批評せよ。

\*「平凡」（二葉亭四迷）（本文略）

## 【本試験】

- 1 愛読する国文学書の一を挙げて評論せよ。  
 2 左の文を文章法上より解剖せよ。

昔は五たび譲りしあとをたづねて天日嗣の位にそなはり八咫知る名をのがれて藐姑射の山にすみかをしめたり

第41回（大正13年）

## 第41回（大正13年）

## 第41回（大正13年）

## 【予備試験】

- 1 短文の異なる形式五種を例示せよ。  
 2 左の文中の動詞形容詞助動詞を抽出して其の活き方を法（段、形）に当て、示せ。

若し道のほとりに辱くも鳳輦を先立て、御旗をあげられ臨幸の厳重なる事も侍らむに参りあへらばその時の進退いかゞ侍らむ。

- 3 左の文を鑑賞批評せよ。

\* 出典不明（本文略）

- 4 左の事項に就きて知れる所を記せ。

(イ) 蒙求 (ロ) 井田

## 【本試験】

- 1 江戸時代の歌論とその時代の歌との関係を述べよ。

- 2 左の書を説明せよ。

東雅 詞八衢 和訓栞 本朝文粹 新葉集

- 3 左の文を文章法上より解剖せよ。

やうやう天の下にあぢきなう人のもの悩みぐさになりてといとはしたなき事多かれど忝なき御心ばへの類なきを頼にて交らひたまふ（源氏物語）

## 第42回（大正14年）

## 【予備試験】

- 1 左の学者の国語学上に於ける重要な著書を挙げよ。

僧契沖 新井白石 富士谷成清

本居宣長

- 2 左の文章に就きて文の成分を説明し且文中の用言を抜出してその活用表を作れ。

行く川の流れば絶えずしてしかももとの水にあらずよどみに浮かぶうたかたはかつ消えかつ結びて久しく止ることなし（方丈記）。

- 3 左の事柄に就きて知れる所を記せ。

(イ) 三綱五常 (ロ) 四六文

- 4 左の文を批評鑑賞せよ。

\*「作文第三十三講」（五十嵐力？）

(本文略)

## 【本試験】

- 1 源氏物語の文章の特色を述べよ。

- 2 平家物語太平記を比較論評せよ。

3 国語のアクセントに就いて知るところを述べよ。

第43回 (大正14年)

【予備試験】

1 左の文章中の主語とそれに対する述語を指示し次に動詞を抜き出してその活用表を作れ。

年頃思ひつる事果し侍りぬ聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけれその参りたる人毎に山へ登りしは何事かありけむゆかしかりしかど神へ参こそ本意なれと思ひて山までは見ず

2 平安時代の著名なる物語及び日記の書名を記せ。

3 左に就きて知れる所を記せ。

(イ) 濂洛關閩の学 (ロ) 建安の七子

4 左の文章に就きて傍線を附したる語を説明し且つ文中に表はれたる芭蕉の心持を述べよ。

\* 出典不明 (本文略)

【本試験】

1 左の事項に就いて述べよ。

風俗歌 宴曲 時代物 幸若舞 旋頭歌

2 徳川時代に表はれたる武家精神に就いて述べよ。

第44回 (大正15年)

【予備試験】

1 「べし」「なり」「たり」「なむ」「や」「か」の各種の用例を挙げその意味を説明せよ。

2 現代文(日露戦争以後の文章)の特徴に就いて述べよ。

3 講談派、桂國派、明星派、アラ、ギ派に就いて知れる所を記せ。

4 (イ) 三体詩 古文眞寶

(ロ) 訓詁学と性理学

【本試験】

1 古今集より新古今集までの和歌の展開を略述せよ。

2 左の書に就きて知れる所を記せ。

和名類聚抄 浜松中納言物語  
鉢かづき 椿説弓張月 冠辞考

3 西洋文典の日本文法に及ぼしたる影響を略述せよ。

第45回 (大正15年)

【予備試験】

1 左の文章に就き単文及び復文を指摘し且その構造を説明せよ。

野分の又の日こそいみじう哀に覚ゆれ立部透垣などの乱れたる前裁ども心苦しげなり大なる木ども倒れ枝など吹き折られたるが萩女郎花などの上によるほひはひ伏せるいと思はずなり(枕草子)

2 国語の興隆につきて略述せよ。

3 左につきて諸氏の説を批評せよ。

\*「蕪村夢物語」(木村架空)(本文略)

4 左につきて知れる所を記せ。

(イ) 淮南子及び文中子の著者

(ロ) 小学及び近思録

【本試験】

1 祝詞に表はれたる精神を説明せよ。

2 能楽の芸術としての性質に就いて述べよ。

3 仮名遣の標準に就いて述べよ。

第47回 (昭和2年)

【予備試験】

1 左の歌につきて文の構成を説明し歌中に於ける用言につきて文語口語両様の活用表を作れ。

かたちこそみ山がくれのくちきなれ心は花になさばなりなむ(古今和歌集)

ひさかたの月の桂も折るばかり家の風をも吹かせてしがな(拾遺和歌集)

2 左の人々につきて知れる所を述べよ。

橘守部 小林一茶 石川雅望 荒木田麗女 松永貞徳

3 左の文を鑑賞批評せよ。

\* 島崎藤村「小語なる古城のほとり」

(本文略)

4 左に就きて知れる所を記せ。

(イ) 格物致知 (ロ) 呂氏春秋

文心雕龍

【本試験】

1 平家物語に現はれたる武士の精神

につきて述べよ。

2 紀貫之紫式部藤原定家の閲歴につきて述べよ。

3 明治時代の口語文の発達につきて述べよ。

第49回 (昭和3年)

【予備試験】

1 左の語を例を挙げて説明せよ。

縁語 序詞 懸詞 折句 枕詞

2 左の歌の係結の関係を説明し歌中に於ける用言の活用表を作れ。

淡路鳥通ふ千鳥のなく声にいくよねざめぬ須磨の関守(金葉和歌集)

ふる雪のみのしるごろもうちきつ、春来にけりと驚かれぬる(後撰和歌集)

3 左の文の意義を実例を挙げ敷衍して説明せよ。

\* 出典不明 (本文略)

4 左の人物に就いて知れる所を記せ。

(イ) 柳宗元 (ロ) 新井白石

【本試験】

1 口語の文法と文語の文法との間に存する主なる差異に就いて述べよ。

2 平安朝の女流日記文学四種を挙げ簡明に解説せよ。

3 左の四種の文は如何なる文献にもちいられたるものなるかを示し且つ漢字使用の異同について述べよ。

(本文略)

第51回 (昭和4年)

【予備試験】

1 和歌と連歌との関係を述べよ。

2 左に就きて「さび」の意義を説明せよ

野明曰 句のさびはいかなる物にや  
去来曰 さびは句の色也閑寂なる句

をいふにあらざたとへば老人の甲冑を  
帯し戦場に働き錦繡をかざり御宴に侍

りても老の姿あるごとし賑なる句にも  
静なる句にもあるものなりたとへば

花守やしろきかしらをつき  
あはせ

先師曰 さび色よくあらはれたり  
(去来抄)

3 左の文章に就きて文の構成を説明し且つ用言の活用表（口語のみの）を作れ。

呉服屋の手代が大きなふろしきづつみを石地蔵の前におろして休みました。がよほど疲れてゐたものと見えていつの間にかぐつすり寝込んでしまひました。

4 左に就きて知れる所を記せ。

(イ) 孝 経 (ロ) 資 治 通 鑑

(ハ) 文献通考

【本試験】

1 江戸時代に於ける歌論の中著しき数説を挙げよ。

2 本居宣長は何故に日本書紀より古事記に重きを置きしか。

3 万葉集に現はれたる文法と古今集に現はれたる文法とに於ける主なる差異に就いて述べよ。

第53回（昭和5年）

【予備試験】

1 浦島伝説羽衣伝説義経伝説を取扱ひたる文学的作品を挙げその作者並に成立時代に就いて知れる限りを記せ。

2 左の文中より主語を摘出してその性質を説明し又助詞形容詞及助動詞の活用表を作れ。

萬のことは月見るにこそ慰むものなれ或人の月ばかり面白きものはあらじと言ひしに又一人露こそ哀れなれと争ひしこそをかしけれ

3 左の詩を評論せよ。

\*「泉」(クラブド <訳>森鷗外)  
(本文略)

4 左に就きて知れる所を記せ。

(甲) 太極図説 (乙) 大日本史

【本試験】

1 発音の仮名遣と歴史的仮名遣とによりて口語の動詞の活用に及ぼす異同について説明せよ。

2 浮世草子・読本・合巻・滑稽本の性質を簡単に説明せよ。

3 左の人々の重なる著書の名を挙げよ。

契沖 谷川士清 伊勢貞丈 平田篤

胤 橘守部

第55回（昭和6年）

【予備試験】

1 左の文法の問題につきて説明せよ。

(イ) 過去の助動詞「き」は動詞に如何に結びつくか。

(ロ) 左の文章を品詞に区別し用言の活用表をつくれ。

なんとも言へぬ美しいきれいな花が野原一面に咲いて居りました。

2 道行文の特色を挙げよ。

3 左の書につきて説明せよ。

詞玉緒 古今要覽稿 小説神髓 古事類苑 貞丈雑記 和訓栞 稜威言別 猿蓑 歴朝詔詞解 新学異見

4 左の二項につきて知れるところを記せ

(イ) 伊藤仁斎

(ロ) 唐宋八家

【本試験】

1 藤原定家の文学史的的地位に就きて記せ。

2 国語国文に関する年表・解題・索引の書名を挙げて簡単に説明せよ。

3 片仮名の發達に就いて述べよ。

第57回（昭和7年）

【予備試験】

1 左の文章に於ける主語と述語との成分を説明し文中の用言を抽出して活用表を作れ。

文ことばなめき人こそいとどにくけれ世をなのために書きなしたる詞のにくここそさるまじき人のもとにあまりかしまりたるもげにわろきことぞ

2 紀行文学に就いて略述せよ。

3 左の文の要旨を述べそれに基づきて芭蕉の俳諧を論評せよ。

\* 出典不明（本文略）

4 左に就いて知れる所を記せ。

(イ) 昭明太子の文学上に於ける業績

(ロ) 王陽明の良知説

【本試験】

1 お伽草子の性質を説明せよ。

2 江戸時代における国語辞書の重なるものに就いて述べよ。

3 左の人々を年代順に排列し主なる著書を挙げよ。

一条兼良 仙覚 二條良基 藤原公任 源順 源俊頼

第59回（昭和8年）

【予備試験】

1 左の文章につきて主語と述語との成分を説明し動詞形容詞助動詞の文語口語活用対照表を作れ。

(イ) この人々の深きこころざしはこの海にもおとらざるべし。

(ロ) 牛のたくさんのつてゐる車がいつかとほりました

2 南北朝時代の和歌について述べよ。

3 左につきて知れる所を記せ。

八代集 六国史 六歌仙 国学四大入 芭蕉七部集

4 左につきて知れる所を記せ。

(イ) 会澤安 (ロ) 王夫之（船山）

【本試験】

1 契沖ノ仮名遣意見ニツイテ論評せよ。

2 歌合ニツイテ略述せよ。

3 左ニツイテ知レル所ヲ記せ。

梁塵秘抄 藤ノ冊子 伽婢子 無名草子 往生要集

第61回（昭和9年）

【予備試験】

1 左の文章につきて主語述語及補足語の成分を説明し動詞形容詞助動詞の活用表を作れ。

秋の月はかぎりなくめでたきものなりいつとても月はかくこそあれとて思ひわかざらん人は無下に心うかるべきことなり

2 歴史物語と軍記物語を比較論評せよ。

3 左の事項につきて記せ。

(イ) 和讃 (ロ) 詞書 (ハ) 六義 (ニ) 両部神道 (ホ) 心学

4 左につきて知れる所を記せ。

- (イ) 陸象山 (ロ) 山鹿素行  
 (ハ) 近思録 (ニ) 言志録
- 【本試験】
- 1 方言研究の目的と方法とにつきて述べよ。
  - 2 江戸時代の小説に及ぼしたる支那文学の影響につきて述べよ。
  - 3 縣居派と桂園派の歌論を比較論評せよ。

## ◆「作文」の部

- 第1回 (明治18年)  
 某(各人奉職スル所ノ校名ニ從フヘシ)ノ学校記  
 教育博物館記  
 修身学中ニ西洋修身ノ書ヲ加フルノ可否ヲ論ズ  
 学力試験ニ赴クトキ同校教員ニ遺シ置ク書翰  
 上京中学校ヨリ依託ノ書籍器械等ヲ購求シテ其ノ仔細ヲ報知スル書翰  
 方今ノ作文ニハ何如ナル文体ヲ目的トスベキヤノ問ヒニ答スル書翰
- 第2回 (明治19年)  
 某学校の記  
 和文を教ふる順序を論ず  
 和文を人にすゝむる書翰
- 第3回 (明治20年)  
 女学校創立の記  
 和漢学教授法の論  
 史をすゝむる書翰
- 第4回 (明治21年)  
 史学の論  
 観桜の紀
- 第5回 (明治24年)  
 大風の記
- 第6回 (明治26年)  
 旅行の記
- 第7回 (明治27年)  
 師範学校卒業生に告ぐ  
 尋常中学校卒業生に告ぐ  
 高等女学校卒業生に告ぐ  
 (通行文と中古文体と両様)
- 第8回 (明治28年)  
 戦死者の遺族に与ふる書
- 第9回 (明治29年)  
 国語教育の要旨

- 第10回 (明治30年)  
 【予備試験】 師道を論ず (普通文体)  
 修学旅行の記 (中古文体)  
 【本試験】 \*不明
- 第11回 (明治31年)  
 【予備試験】 文字ノ説  
 【本試験】 \*筆記試験無し
- 第12回 (明治32年)  
 【予備試験】 神皇正統記を読む (普通文体)  
 【本試験】 (師範学校中学校高等女学校国語科用読本には差異を立つる必要ありや)
- 第13回 (明治33年)  
 【予備試験】 国語統一の方法を論ず (普通文体)  
 【本試験】 作文添削の標準を論ず
- 第14回 (明治34年)  
 【予備試験】 中等教育に於ける国語漢文の関係を論ず (普通文)  
 【本試験】 自己の経歴(叙事文)
- 第15回 (明治34年)  
 【予備試験】 ? 吾が郷里  
 【本試験】 ?
- 第16回 (明治35年)  
 【予備試験】 海 (普通文)  
 【本試験】 \*不明
- 第17回 (明治36年)  
 【予備試験】 \*不明  
 【本試験】 \*不明
- 第18回 (明治37年)  
 【予備試験】 \*不明  
 【本試験】 \*不明
- 第19回 (明治38年)  
 【予備試験】 戦争と文学  
 【本試験】 吾が家庭 (普通文)

第20回（明治39年） 【予備試験】 婚礼を祝ふ文 死亡を弔ふ文 【本試験】 高等女学校開校の祝辞	第31回（大正6年） 【予備試験】 わが母校（普通文） 【本試験】 わが友（普通文）	第42回（大正14年） 【予備試験】 新緑（口語体） 【本試験】 わが国文研究の態度（文語体）
第21回（明治40年） 【予備試験】 新聞紙（普通文） 【本試験】 寄宿舎（普通文）	第32回（大正7年） 【予備試験】 体育（文語体） 【本試験】 我が家（文語体）	第43回（大正14年） 【予備試験】 晩秋（口語体） 【本試験】 運動競技についての感想（文語体）
第22回（明治41年） 【予備試験】 夏期休業（普通文） 【本試験】	第33回（大正8年） 【予備試験】 わが郷の秋（口語文） 【本試験】 講和大使を迎ふ（文語文）	第44回（大正15年） 【予備試験】 旅に出て（口語体） 【本試験】 方丈記を読む（文語体）
第23回（明治42年） 【予備試験】 公徳（普通文） 【本試験】	第34回（大正9年） 【予備試験】 夏の夕（文体随意） 【本試験】 現代の時勢に鑑みて青年に論ず（文語文）	第45回（大正15年） 【予備試験】 現今の世相に対する教育者の覚悟（口語体） 【本試験】 祖国（文語体）
第24回（明治42年） 【予備試験】 学校と家庭（普通文） 【本試験】 吾が幼時（普通文）	第35回（大正10年） 【予備試験】 わが愛読の書（普通文） 【本試験】 わが希望（文語体）	第47回（昭和2年） 【予備試験】 菅原道真伝を読む（口語体） 【本試験】 昭和の御代と国民の覚悟（文語体）
第25回（明治44年） 【予備試験】 山と海 【本試験】 支那歴史を読む（普通文）	第36回（大正11年） 【予備試験】 わが勉強の状況を友人に知らせる文（口語文） 【本試験】 月夜（文語体）	第49回（昭和3年） 【予備試験】 思想善導に関する意見 【本試験】 御大礼に際して国民の覚悟を述ぶ（文語体）
第26回（大正元年） 【予備試験】 図書館（普通文） 【本試験】 我が私淑する人物（普通文）	第37回（大正11年） 【予備試験】 大正十一年を送る（口語体） 【本試験】 万葉集を読み（文語体）	第51回（昭和4年） 【予備試験】 時勢に鑑みて節約を人に勧む（口語体） 【本試験】 我が読書法（文語体）
第27回（大正2年） 【予備試験】 我が郷里（普通文） 【本試験】 菊を観る（普通文）	第38回（大正12年） 【予備試験】 初夏の田園（口語文） 【本試験】 卒業式告示（校長に代りて）（文語体）	第53回（昭和5年） 【予備試験】 我が国の韻文の将来に就いて（口語体） 【本試験】 我が国体（文語体）
第28回（大正3年） 【予備試験】 読書法（普通文体） 【本試験】 欧州戦乱に就きて（普通文）	第39回（大正12年） 【予備試験】 震災の感想（口語体） 【本試験】 わが経歴（文語体）	第55回（昭和6年） 【予備試験】 秋の夜（口語体） 【本試験】 正義の勝利（文語体）
第29回（大正4年） 【予備試験】 学校卒業式祝辞（普通作文） 【本試験】 秋（普通文）	第40回（大正13年） 【予備試験】 五月初の感想（口語体） 【本試験】 夏期休業（文語文）	第57回（昭和7年） 【予備試験】 鎮守祭（口語体） 【本試験】 平家物語を読む（文語体）
第30回（大正5年） 【予備試験】 旅行（普通文） 【本試験】 秋の田舎（普通文）	第41回（大正13年） 【予備試験】 我が時勢観（口語体） 【本試験】 我等の進むべき途（文語体）	

第59回 (昭和8年)

【予備試験】我が最も敬慕する学者

【本試験】日本精神 (文語体)

第61回 (昭和9年)

【予備試験】人格と其の感化

【本試験】昭和九年を送る (文語体)

◆ 「解釈」の部

(但し出題作品名のみ)

第1回 (明治18年)

- 1 「栄華物語」
- 2 「源氏物語」
- 3 「伊勢物語」
- 4 「増鏡」
- 5 「落窪物語」
- 6 「宇治拾遺物語」
- 7 「神皇正統記」
- 8 「徒然草」
- 9 「読史余論」
- 10 「万葉集」
- 11 「万葉集」
- 12 「万葉集」
- 13 「古今和歌集」
- 14 「古今和歌集」
- 15 「古今和歌集」

第2回 (明治19年)

- 1 「源氏物語」
- 2 「枕草子」
- 3 「徒然草」
- 4 「十六夜日記」
- 5 「琴後集」(村田春海)
- 6 「泊?舎文集」(清水浜臣)
- 7 「万葉集」
- 8 「万葉集」
- 9 (イ) 「古今和歌集」  
(ロ) 「古今和歌集」

第3回 (明治20年)

- 1 「伊勢物語」
- 2 「枕草子」
- 3 「徒然草」
- 4 「増鏡」
- 5 「琴後集」(村田春海)
- 6 「北邊文集」?
- 7 「万葉集」
- 8 「万葉集」
- 9 「古今和歌集」
- 10 「古今和歌集」

第4回 (明治21年)

- 1 「枕草子」

- 2 「続日本紀」
- 3 「日本(書?)紀」

第5回 (明治24年)

- 1 「源氏物語」
- 2 「万葉集」
- 3 (イ) 「古今和歌集」  
(ロ) 「古今和歌集」
- 4 「後拾遺集」
- 5 「新古今和歌集」
- 6 「日本書紀」

第6回 (明治26年)

- 1 「源氏物語」
- 2 「大鏡」
- 3 「万葉集」
- 4 「古今和歌集」
- 5 「新古今和歌集」

第7回 (明治27年)

- 1 「宇治拾遺物語」
- 2 「徒然草」
- 3 「古今和歌集」
- 4 「新古今和歌集」
- 5 「新葉和歌集」

第8回 (明治28年)

- 1 「枕草子」?
- 2 「十六夜日記」
- 3 出典不明
- 4 さうざうし ゆふけ ゆふげ そ  
ばそばし わくらはに らうたし ら  
うがはし さくじる みづはぐむ ほ  
うけづく

\* 単語句の解釈 (意味)

5 略

\* 書取問題2問

第9回 (明治29年)

- 1 出典不明
- 2 出典不明
- 3 (イ) 「万葉集」(4373)  
(ロ) 「古今和歌集」(1060)
- 4 出典不明

\* 傍線部の単語句問題4問?

第10回（明治30年）

【予備試験】

- 1 「枕草子」
- 2 出典不明
- 3 (イ) 出典不明  
(ロ) 「万葉集」(978)
- 4 出典不明 \*傍線部のみ
- 5 靱負の佐 公脚 回録 攝籙 亭子院のみかど けやけき奴かな 飾磨のひたゝれ 弓矢の冥加 うるはしき事よりも艶になまめかし むくつけくおそろし

\*単語句の解釈（意味）

【本試験】

筆記試験に解釈問題はなし

第11回（明治31年）

【予備試験】

- 1 出典不明
- 2 「源氏物語」(?)
- 3 (イ) 出典不明  
(ロ) 出典不明  
(ハ) 出典不明  
(ニ) 出典不明
- 4 (イ) 「拾遺和歌集」(?)  
(ロ) 「古今和歌集」(?)

【本試験】

筆記試験無し

第12回（明治32年）

【予備試験】

- 1 「枕草子」  
\*和歌を含む
- 2 「太平記」(?)
- 3 (イ) 出典不明  
(ロ) 「燕村句集」(?)

【本試験】

- 1 (イ) 「増鏡」?  
(ロ) 「古今和歌集」(1094)
- 2 出典不明

第13回（明治33年）

【予備試験】

- 1 「増鏡」?
- 2 出典不明
- 3 (イ) (内容 形式)

(ロ) (消極的 積極的)

- 4 参勤交替 刀自 行膝 左ノ宰相 中将 怠状

【本試験】

- 1 「東関紀行」
- 2 「新古今和歌集」
- 3 「燕村句集」
- 4 (イ) いかになりたまひにきとか人にもいひ侍らむ  
(ロ) いかになりたまひしにと人にもいひ侍らむ

\*二文の意義の異同を説明せよ。

第14回（明治34年）

【予備試験】

- 1 「大鏡」
- 2 「十訓抄」
- 3 斎王 御息所 おほいまうちぎみ 扶持米 柳營 矛盾 塞翁馬 朝三暮四 權輿 布衣の侍

\*単語句の意味

【本試験】

- 1 「枕草子」
  - 2 「泊酒舎文集」
  - 3 「古今和歌集」(46)
- \*誤謬の指摘

第15回（明治34年）【予備試験】

- 1 「増鏡」
- 2 「古今和歌集」(1879)
- 3 羅城門 節折 郢曲 准后 膠柱 池魚禍 友子 白龍魚服 神嘗祭 新嘗祭の別

\*単語句の意味

【本試験】

- 1 「土佐日記」
- 2 「源氏物語」
- 3 「室鳩巢文」

第16回（明治35年）

【予備試験】

- 1 「枕草子」
- 2 めもあやなり おほどか 塗籠 壺切の劔 御湯殿の鳴絃 猷芹之誠 点心 度牒

\*単語句の解釈（意味）

- 3 滯標 賢木 槿 雲隠 總角 蜻蛉(以上源氏物語の巻名) 小大君 伊勢大輔 万里小路藤房 月次祭 荷前幣 慰斗目 掛 春宮坊

\*単語句の読み方

【本試験】

- 1 「鎌倉右大将西行法師を召し問ふ記事」(上田秋成)
- \*大意の要約・傍線部の解釈
- 2 「庭訓往来」

第17回（明治36年）

【予備試験】

- 1 出典不明
- 2 (イ) 「平家物語」  
(ロ) 「太平記」

【本試験】

- 1 「源氏物語」
- 2 「愚管抄」

第18回（明治37年）

【予備試験】

- 1 「枕草子」
- 2 (イ) 「小袖曾我」  
(ロ) 「小督」

\*何れも謡曲

【本試験】

- 1 「うけらが花」
- 2 出典不明

第19回（明治38年）

【予備試験】

- 1 理想 連想 定義 現象 寢殿 四阿屋 いつきの宮
- \*単語句の意味?

- 2 (イ) 謡曲八島  
(ロ) 「奥の細道」  
(ハ) (犬も歩けば棒にあたる)  
(ニ) (仏の顔も三度)

(ホ) (武士は食はねど高楊枝)

- 3 「今鏡」
- 4 「しみのすみか物語」(石川雅望)

【本試験】

- 1 「大鏡」
- 2 出典不明

## \* 催馬楽

第20回 (明治39年)

## 【予備試験】

- 1 出典不明
- 2 自然淘汰 万有 人格 軽文学  
純文学 刹那 一機軸を出す 中原の  
鹿誰が手に落つ

\* 単語句の意味？

## 【本試験】

- 1 「源氏物語」
- 2 「泊泊舎文集」

第21回 (明治40年)

## 【予備試験】

- 1 「大鏡」
- 2 (イ) 「古今和歌集」(962)  
(ロ) 「古今和歌集」(1097)  
(ハ) 「古今和歌集」(867)

## 【本試験】

- 1 「万葉集」(16)
- 2 「古今和歌集序」
- 3 「平家物語」

第22回 (明治41年)

## 【予備試験】

- 1 「徒然草」
- 2 「太平記」

## 【本試験】

- 1 「万葉集」(13)
- 2 「源氏物語」
- 3 「増鏡」

第23回 (明治42年)

## 【予備試験】

- 1 「増鏡」
- 2 (イ) 「古今和歌集」(161)  
(ロ) 「新古今和歌集」(693)

## 【本試験】

- 1 「古事記」
- 2 「枕草子」
- 3 さうじみ はしたなし すぎなう  
みじろぐ なよびか 五十日の餅  
踏歌 叙爵 攤うつ 上藤

\* 単語句の意味？

第24回 (明治43年)

## 【予備試験】

- 1 「増鏡」
- 2 (イ) 「古今和歌集」(867)  
(ロ) 「古今和歌集」(420)  
(ハ) 「古今和歌集」(212)

## 【本試験】

- 1 「万葉集」(45)
- 2 「源氏物語」

第25回 (明治44年)

## 【予備試験】

- 1 「増鏡」
- 2 (イ) 「古今和歌集」(277)  
(ロ) 「古今和歌集」(872)  
(ハ) 「古今和歌集」(1098)

## 【本試験】

- 1 「源氏物語」
- 2 「万葉集」

第26回 (大正元年)

## 【予備試験】

- 1 「平家物語」
- 2 (イ) 「古今和歌集」  
(ロ) 「奥の細道」  
(ハ) 「風俗文適」

## 【本試験】

- 1 「大鏡」
- 2 「枕草子」

第27回 (大正2年)

## 【予備試験】

- 1 「増鏡」
- 2 (イ) 「古今和歌集」(901)  
(ロ) 「新古今和歌集」(51)  
(ハ) 「蕪村句集？」  
(ニ) 出典不明

## 【本試験】

- 1 「源氏物語」
- 2 「万葉集」(38)

第28回 (大正3年)

## 【予備試験】

- 1 「徒然草」
- 2 (a) 「古今和歌集」(277)  
(b) 「古今和歌集」(1098)

(c) 「千載和歌集」

## 【本試験】

- 1 「枕草子」
- 2 「古事記」

第29回 (大正4年)

## 【予備試験】

- 1 「増鏡」
- 2 「平家物語」

## 【本試験】

- 1 「源氏物語」
- 2 「古事記」
- 3 (イ) 「万葉集」(267)  
(ロ) 「新古今和歌集」(340)

第30回 (大正5年)

## 【予備試験】

- 1 「増鏡」
- 2 「太平記」

\* 傍線分のみ解釈

## 【本試験】

- 1 「枕草子」
- 2 「古今和歌集序」

第31回 (大正6年)

## 【予備試験】

- 1 「大鏡」
- 2 「平家物語」

## 【本試験】

- 1 「源氏物語」
- 2 「万葉集」(973?)

第32回 (大正7年)

## 【予備試験】

- 1 徒然草
- 2 (a) 「古今和歌集」(1094)  
(b) 「古今和歌集」(1097)  
(c) 「新古今和歌集」(261)

## 【本試験】

- 1 「古事記」
- 2 「枕草子」

第33回 (大正8年)

## 【予備試験】

- 1 「増鏡」
- 2 (イ) 「新古今和歌集」(1617)

- (ロ) 「新古今和歌集」(1773)  
 (ハ) 「新古今和歌集」(987)

## 【本試験】

- 1 「源氏物語」  
 2 「万葉集」(319)

第34回（大正9年）

## 【予備試験】

- 1 「増鏡」  
 2 「虞美人草」

## \*要旨説明

## 【本試験】

- 1 「枕草子」  
 2 「万葉集」(1047)

第35回（大正10年）

## 【予備試験】

- 1 「徒然草」  
 2 「現代詩人選集」

## \*要旨説明

## 【本試験】

- 1 「源氏物語」  
 2 「万葉集」(230)

第36回（大正11年）

## 【予備試験】

- 1 「徒然草」  
 2 「小鳥の来る日」(吉田絃二郎?)

## \*要旨説明

## 【本試験】

- 1 「枕草子」  
 2 「万葉集」(207)

第37回（大正11年）

## 【予備試験】

- 1 「十訓抄」  
 2 (a) 「新古今和歌集」(861)  
 (b) 「新古今和歌集」(1558)  
 3 「惜しみなく愛は奪ふ」(有島武郎)

## \*要旨説明

## 【本試験】

- 1 「源氏物語」  
 2 「万葉集」(800, 801)

第38回（大正12年）

## 【予備試験】

- 1 「大鏡」  
 2 (イ) 出典不明  
 (ロ) 出典不明  
 3 「一本の枝」(武者小路実篤?)

## \*要旨説明

## 【本試験】

- 1 「枕草子」  
 2 「万葉集」(971, 972)

第39回（大正12年）

## 【予備試験】

- 1 「大鏡」  
 2 「文学序説」(土居光知?)

## \*要旨説明

## 【本試験】

- 1 「古事記」  
 2 (a) 「新古今和歌集」(1644)  
 (b) 「新古今和歌集」(1738)  
 (c) 「万葉集」(458)

第40回（大正13年）

## 【予備試験】

- 1 「増鏡」  
 2 (a) 「新古今和歌集」(980)  
 (b) 「古今和歌集」(300)

## 【本試験】

- 1 「源氏物語」  
 2 「万葉集」(1047)

第41回（大正13年）

## 【予備試験】

- 1 「十訓抄」  
 2 (a) 「古今和歌集」(934)  
 (b) 「古今和歌集」(1057)  
 (c) 「新古今和歌集」(452)

## 【本試験】

- 1 「万葉集」(897)  
 2 「源氏物語」

第42回（大正14年）

## 【予備試験】

- 1 「大鏡」  
 2 (a) 「古今和歌集」(976)  
 (b) 「新古今和歌集」(156)

## 【本試験】

- 1 「枕草子」

- 2 (a) 「万葉集」  
 (b) 「万葉集」  
 (c) 「万葉集」

第43回（大正14年）

## 【予備試験】

- 1 「十訓抄」  
 2 (a) 「古今和歌集」  
 (b) 「古今和歌集」

## 【本試験】

- 1 「源氏物語」  
 2 「万葉集」

第44回（大正15年）

## 【予備試験】

- 1 「大鏡」  
 2 (イ) 「古今和歌集」  
 (ロ) 「後撰集」  
 (ハ) 「新古今和歌集」

## 【本試験】

- 1 「源氏物語」  
 2 「万葉集」

第45回（大正15年）

## 【予備試験】

- 1 出典不明  
 2 (a) 出典不明  
 \*和歌  
 (b) 「新古今和歌集」

## 【本試験】

- 1 「古事記」  
 2 「万葉集」

第47回（昭和2年）

## 【予備試験】

- 1 「今鏡」  
 2 (a) 「古今和歌集」  
 (b) 「曾丹集」

## 【本試験】

- 1 「枕草子」  
 2 「万葉集」

第49回（昭和3年）

## 【予備試験】

- 1 「平家物語」  
 2 (a) 「古今和歌集」

(b) 「千載和歌集」

【本試験】

1 「源氏物語」

2 「万葉集」

第51回 (昭和4年)

【予備試験】

1 「藤妻冊子」(上田秋成)

2 (a) 「新古今和歌集」

(b) 「柿園詠草」

【本試験】

1 「新古今和歌集序」

2 (a) 「万葉集」

(b) 「万葉集」

(c) 「万葉集」

第53回 (昭和5年)

【予備試験】

1 「大鏡」

2 (a) 「古今和歌集」

(b) 「調鶴集」

【本試験】

1 「源氏物語」

2 (a) 「万葉集」

(b) 「万葉集」

(c) 「万葉集」

第55回 (昭和6年)

【予備試験】

1 「太平記」

2 (a) 「新古今和歌集」

(b) 「千々廻屋集」

【本試験】

1 「大鏡」

2 (イ) 「賀茂翁家集」

(ロ) 「柿園詠草」

第57回 (昭和7年)

【予備試験】

1 「伴蒿蹊におくる」(村田春海)

2 (イ) 「新古今和歌集」(1755)

(ロ) 「竹亭夏月」

【本試験】

1 「枕草子」

2 (イ) 「古今和歌六帖」

(ロ) 「赤人集」

(ハ) 「古今和歌六帖」

第59回 (昭和8年)

【予備試験】

1 「駿臺雑話」

2 (a) 「新古今和歌集」

(b) 「桂園一枝」

【本試験】

1 「源氏物語」

2 (a) 「万葉集」

(b) 「万葉集」

(c) 「橘守都家集」

第61回 (昭和9年)

【予備試験】

1 出典不明

2 (イ) (田安宗武) \*和歌(神楽)

(ロ)「人の七十の賀に橘によせて」

(賀茂真淵) \*和歌

【本試験】

1 出典不明(古事記?)

2 出典不明(万葉集?)

※\*の説明は、資料作成者(小笠原)による。

※「解釈」の部における歌集の後の番号(例「万葉集」(4373)等)は、出題された和歌のそれぞれの歌集における歌番号を意味している(但し、確認ができていないもののみ)。

※本稿は、全国大学国語教育学会第109回大会(2005年10月)での発表を元に、その後の調査を踏まえて大幅に加筆修正を行ったものである。

※本研究は、文部科学省科学研究費補助金(若手研究(B))『「文検国語科」試験問題の研究』(2010-2013)(研究代表者:小笠原拓, 課題番号:22730691)の交付を受けて行なった研究成果の一部である。

※資料の収集にあたって、国立国会図書館・愛知淑徳大学付属図書館等の各公共図書館および神戸大学発達科学部船寄俊雄教授より多くの資料を提供していただいた。感謝の意を表したい。

(2014年1月31日受付, 2014年2月10日受理)